この素晴らしい世界に灼熱の怪獣王を！

千本虚刀　斬月

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この素晴らしい世界に祝福を！の世界にゴジラや東宝怪獣達をぶっ込んでみたら面白いんじゃね？と思って書いてみた。

爆焔や仮面の悪魔などのスピンオフネタをちょいちょいぶっ込みます。

目次

なんとなくの設定 ―― 1
このすば！
女神転生 ―― 8
ＶＳガバラ ―― 12
ＶＳアーネス ―― 16
アクセル ―― 21
水の女神 ―― 25
レベリング ―― 29
ＶＳゲソラ・ガニメ・カメーバ ―― 32
尖兵 ―― 37
女神エリス／盗賊クリス ―― 43
ゴジラＶＳキングギドラ　～ご機嫌なキャベツ山盛り添え～ 48
ＶＳカマキラス ―― 52
思っていた以上に人類は詰んでいた ―― 55
魔剣の勇者 ―― 59
魔剣の勇者様のご冥福をお祈りします ―― 64
おや？安楽少女の様子が ―― 69
ノイズの技術力は世界一ィィィ!!できんことはないイイィ――ッ!!! ―― 74
ゴジラＶＳデストロイヤー ―― 78
機動要塞陥落 ―― 83
ＺＩＬＬＡ ―― 89

なんとなくの設定

バーニングゴジラ

詳細はゴジラ（１９５４）、ゴジラ（１９８４）～ゴジラｖｓデストロイアを参照されたし。身長は１００メートルから５メートルにまで縮小している。かつてと同じ温度の熱線を吐く事は出来るが、口径とエネルギーの総量もサイズに比例して縮小している為、考え無しに乱発しているとすぐにガス欠になってしまう。

職業：怪獣王

スキル

復讐者

人類に対する憤怒と憎悪。例え人の素晴らしさを知ったとしても、魂の随にまで焼き付いているため、永劫に昇華される事は無い。復讐対象にはクリティカル率が上昇する。

ブラッドヒート

体内炉心の核エネルギーが暴走状態であり、常時オーバーロード状態。放っておけば内部温度が際限なく上昇し続ける。最終的には核爆発かメルトダウンしかねない。これを避けるには、内在エネルギーの大半を消費したうえで外部から強制的に冷却するしか無い。もっとも、ゴジラ自身に制御不能である以上は姑息療法にしかならないが。

放射熱線

ゴジラの代名詞とも言える攻撃。背鰭を明滅させて、口腔から超高温の核焔を放つ。様々な派生技や強化技がある。

体内放射

熱線を喉元で発射を抑え、そのエネルギーを衝撃波のようにして全身から放出する。

Ｇ細胞

規格外なほどの自己再生力と耐性獲得力と環境適応力を併せ持っ

ており、無限の規模拡大を可能とする。レベルが上限に達すると自分自身を変革し、更なるレベル上限を設定、これを無限に繰り返す。つまり、ゴジラには寿命が存在しない。それゆえにその遺伝子の制御は至難の業。ゴジラ以外がこれを摂取すると、たちまちG細胞に侵食され変異を余儀なくされる。事実上ゴジラ専用スキル。

闘争本能

直感・第六感によって敵たり得る者の存在を感じ取り、向かっていく。戦闘時には戦闘継続能力全般の上昇に加え威圧、混乱、幻惑といった精神干渉を無効化する程の勇猛さを発揮し、更にはカンで即座に最適な行動を導き出せる。ただし、思考が「敵を斃す」に固定される。

怪獣王の咆吼

これを聞いた者は生物としての根源的な恐怖に囚われる。並大抵の相手ならば思考能力を停止させ、恐慌状態に陥る。

エネルギーチャージ

魔力を吸収して攻撃エネルギーに変換できる。「ドレインタッチ」のようにエネルギーを他者に譲渡する事は出来ないが、直接触れなくてもいい。自身に放たれた攻撃魔法も吸収できるが、直接受け止めなければならない為、ダメージは負う。

射程向上

魔法や狙撃等の遠距離攻撃系スキルの有効射程距離を拡張する。1ポイントにつき1km上昇。

魔力収束

攻撃の範囲を絞ることで、密度を高め貫通力を上昇させることを可能とするスキル。

ネガ・ジェネシス

この素晴らしい世界に召喚された怪獣達は、正しい理の内側の存在に対して強い耐性を獲得する。

神聖拘束制御術式解放

自分の意志で何時でも本来のサイズに戻ることが出来る。

？？？？？？？？？？
？？

サキエル
水と繁栄を司る慈愛の大天使。アクアに無茶振りされたりこき使われる事が多い。本来は部署が違うのに。水の行使については、流石に単純な規模ではアクアには及ばないが、０～１００度までなら自由に水温を調節できる。別名をザドキエルとも言い、『生命の樹』の第４セフィラの守護を務める智天使でもある。

職業：アークウィザード

スキル
グランドクロス
祈りを込めて十字を切ることで、天空からの裁きが十字を描き、敵を切り裂く。アンデット系と魔族に特効効果。リフレクトで反射されない利点もある。
フォトン・レイ
虹の如き魔力光を放ち、敵陣を広範に渡って殲滅する。最上級聖光魔法。
ストライク・エア
空気を凝縮して一気に解き放つ事で敵を薙ぎ払う。風を集束させるのに多少時間を要する。
マスター・オブ・ウェザー
自身の力のみで積乱雲を造り、周囲一帯に豪雨を降らせる。
コール・オブ・ブリザード
悉くを凍てつかせる猛吹雪を局地的に発生させる。使用にはあらかじめ雨雲を呼んでおく必要がある。
セイクリッド・クールダウン
対象の戦闘意欲を沈静化し、各種バフをリセットする。問答無用の

賢者タイム。
アブソリュート・ゼロ
―２７３℃というほぼ絶対零度の光弾を発射し、直撃した物体を一瞬で凍結するうえ、わずかな衝撃で分子レベルまで破砕する。窮極の氷結魔法だが、それだけに大天使サキエルをしても発射にはほぼ全ての魔力を消費することから、多用はできない。
ダイアモンドダスト
掌から強力な冷気の波動を放ち、全てを凍結させた後に指をパチンと鳴らし破砕させる。
空中連続攻撃（エアリアル・コンボ）
有翼種特有のスキル。翼の瞬間推力を利用した変則的な三次元格闘技法。
鉄　拳　聖　裁（ＨＡＬＬＥＬＵＪＡＨ）
天使の拳法。拳打に聖気を纏わせる。悪魔とアンデッド相手の場合はクリティカル率が上昇する。
解析魔法（ライブラ）
使用した相手の名前と、大まかな来歴と、ステータスを看破できる。
？　？　？　？　？　？　？　？　？　？
ビオランテ・リコリス
とある安楽少女がゴジラの影響を受け続けて変異した存在。通称『彼岸棲姫』
彼岸花は曼珠沙華とも呼ばれ、仏教では白色柔軟で、これを見る者はおのずから悪業を離れるという天界の花だとされている。
花言葉は「情熱」「独立」「再会」「諦め」「悲しい思い出」「想うはあなた一人」「また会う日を楽しみに」「転生」
スキル
杭

自陣地に張り巡らせた根や、幹から伸ばした蔓で相手を串刺しにする。鮮血を撒き散らし絶命する様は、さながら曼珠沙華の如し。

蔓

自在に操ったり伸ばしたり増やしたり出来る。先端はハエ取り草みたいな形状で、そこから種を撃ち出したり、樹液を吐きかけたりできる。

根

地中に張り巡らせる事で一帯を自身の領土にする。パワーとタフネスが上昇し、オートリジェネレーションの効果。

樹液

生身の人間が浴び続ければ数秒で骨になる程の強酸性。

果実・花粉

高純度のアルカロイドを多種多量に含んでいる。成分や濃度は自分の意志で自由に調整できる。

種

ライフル並の威力で撃ち出せる。多くの生物にとって猛毒。

光合成

陽光を浴びる事でエネルギーをチャージし、体力と魔力の回復や、収束回転させ撃ちはなつ事が出来る。

G細胞（仮）

規格外なほどの自己再生力と耐性獲得力と環境適応力を併せ持っており、無限の規模拡大を可能とする。レベルが上限に達すると自分自身を変革し、更なるレベル上限を設定、これを無限に繰り返す。元の存在と乖離していき、ゴジラに近付いていく。

嚇怒

戦闘で敵から一定以上のダメージを受けると自動で発動。ダメージ量に応じて攻撃力が上昇。思考が怒りに染まり「敵を斃す」に固定される。

？　？　？　？　？　？　？　？　？　？

？　？

ポートダーウィン
艦これの港湾棲姫をモチーフに作られたオートマタ。
デストロイヤー開発責任者が侵入者迎撃用に制作した特別なゴーレム。戦闘行為に対してはやや消極的だが、本気出すとかなり強い。同型のプロトタイプが存在する。

スキル
自己精製
魔力さえあれば各種武装を自身で錬成できる。各種武装の中には自分自身も含まれているため、ある程度までのダメージならば自分で修復できる。
艦載機
飛行型ゴーレム。機体下部にメーサーバルカン砲一門が設置されている。超高感度カメラ・赤外線レーダー・アクティブソナー・サーモサーチャー・動体スキャナー・重力測定器・レーザー照準追尾システムが互いを補完。勿論、自爆機能も搭載されている。
スパイラルグレネードミサイル
艦載機の滑走路も兼ねている邪竜の顎から発射。搭載されている武装の中では間違いなく最強である。
スパイラルクロウ
両掌の鉤爪はオリハルコンで出来ていて、可変式ドリルアームでもある。
クラッシャードリル
額の角もまたオリハルコン製で、ドリルに変形させられる。
自熱ナパーム弾
砲塔より発射。本来はオーバーヒート防止用の排熱システム。
ヒートドレイン
周囲や触れたものから熱エネルギーを吸収し、自身の魔力に変換できる。

対化物戦闘用１３ｍｍ炸裂徹鋼弾
ぶっちゃけアーカードが使ってたアレ。
水上歩行
水の上に直立しながら進むことが出来る。スピードは歩く程度。
Ｇ細胞（仮）
規格外なほどの自己再生力と耐性獲得力と環境適応力を併せ持っており、無限の規模拡大を可能とする。レベルが上限に達すると自分自身を変革し、更なるレベル上限を設定、これを無限に繰り返す。元の存在と乖離していき、ゴジラに近付いていく。
嚇怒
戦闘で敵から一定以上のダメージを受けると自動で発動。ダメージ量に応じて攻撃力が上昇。思考が怒りに染まり「敵を斃す」に固定される。

このすば！
女神転生

怪獣王ゴジラ。その存在は科学という力を振りかざし何処までも増長する人類に対して、地球が抑止力として生み出した破壊神であるのかも知れない。

しかし、そのゴジラにさえ死は訪れる。躯が溶融し大量の放射能を東京に撒き散らしながら骨さえ残さず、遂にその命を鎖したのだった。

？　？　？　？　？　？　？　？　？

ふと意識を取り戻す。そこは白く広大な空間で、少し視線を下げると人間の雌型が二匹居た。否、ソレっぽい形をしているが恐らくどちらも人間では無いのだろう。片方は背中から三対の白い翼を生やしていて、頭上には光の輪が在る。もう片方も見た目こそ人間と変らないが、本能がモスラと似た様な匂いを察知した。どちらも人間の域を逸脱した、それこそ自分が戦ってきた怪獣達にも比肩しうる能力の持ち主なのだろう。

『なんだお前達は？人間では無いのは理解できるが。いや、それ以前にオレは死んだはずだ。』

「ええ、その認識に間違いはありません。貴方は現世において、大量の放射能を東京に撒き散らしながら骨さえ残さずに溶解しました。つまり此処は死後の世界です。初めまして、怪獣王ゴジラさん。私の名はアクア。日本において死した者の魂を導く女神です。そしてこっちにいるのが」

「水と繁栄を司る天使サキエルと申します。」
『神？天使？良く分からんが、要は人間共を束ねる上位種か？』
「はい、その通りです。さて、ゴジラさん。今回は貴方を特例でこの場にお越し頂いた訳ですが、ある異世界に行って頂きたいのです。」
　その女神曰く、その世界には魔王と呼ばれる存在と配下の魔物達が居て人類を脅かしている。その世界で死んだ者が増えすぎて、しかも輪廻転生を断る者が後を絶たなくなっているのだとか。このままではその世界は遠くない未来において子供が生まれず、人は絶滅してしまう。更には死んだ魂が昇天までもを拒み、結果としてアンデットやリビングデッドとなり現世を彷徨う者も増えるという負のスパイラルに入っているらしい。そこで天界は苦肉の策に出た。若くして死んだ未練の多い人間達を、肉体や記憶はそのままで送り出すのだ。それも、送ってもすぐに死なれても意味が無いので、何か1つだけ転生先の世界に好きなものを持って征かせる。その転生特典が大問題を引き起こした。ある転生者に特典として持たせた「ランダムにモンスターを召喚する」神器が魔王軍の手に渡ってしまい、本来の所有者以外が使用する場合は相応の対価や代償が必要な代物である筈なのに、次々に怪獣を召喚している所為で滅びに拍車をかける事態となったのだ。
　だがゴジラからすれば、そんな事情など知った事では無い。何より人間共のガーディアンとして良い様に使われるなど死んでも嫌だ。
「私達からの依頼はあくまで召喚された怪獣達と魔王軍の撃滅。ソレさえ果たしてくれるなら文句は言いません。あ、でも出来る限り周りへの被害は抑えてね。此方から依頼している以上、勿論タダとは言わないわ。死の危機に瀕している貴方の息子を生き返らせてあげましょう！」
『ッッ!?!!・・・出来ると、言うのか？・・・本当に？』
「当然って、熱っ!!熱いからちょっと落ち着いて！女神のお肌がこんがり小麦色に焼けちゃうわ。」
『――――――――――――』
「調子に乗ってつい巫山戯てしまい、誠に申し訳ありません。反省し

ていますので、怒りをお鎮め下さい。」
　この女神様は、それはそれは綺麗な土下座をなさったのであった。
「・・・コホン、先程アクア様が言ったように貴方は大量の放射能を東京に撒き散らしながら死にました。そして貴方達は放射性物質を吸収する事で極めて強力な自己再生能力を発揮する種族でもある。」
「んで、私達の権能で進化を後押ししていっそのこと完全なゴジラにしちゃうわけ。どう？悪くない話でしょ？」
『ああ、本当にそうしてくれるならな。』
「ふふん。まあ視てなさいって。」
　アクアはそう言うと指をパチンと鳴らす。すると巨大なモニターが出現し、ゴジラの放射能に塗れた筈の東京が映し出されていた。
　そして、放射能を吸収する事で完全なゴジラと成り、新たなる怪獣王として高らかに咆吼するジュニアの姿が。
『そうか。嗚呼――――安心した。』
　その一言に一体どれだけの想いがこもっていたのか、余人にはもはや推し量る事も出来ない。
　ゴジラがこうして死んだ今、彼はこの世で唯一無二の存在である。この先、数多の艱難辛苦が待ち受けているに違いない。だが、きっとその全てを乗り越えて王道を歩み続けるだろう。忌むべき覇道しか歩めなかった己とは違って。
『もう思い残す事は無い。感謝する。』
「そう、なら良かったわ。こっちとしても甲斐があるってものだしね。それで、依頼の方は引き受けてくれると言う事で良いのよね？」
『ああ、良いだろう。怪獣共と魔王軍の討伐、引き受けよう。』
「よかった～。ここまでやって万一にも交渉失敗なんて事になってたら左遷、ヘタすればクビになってたところだったわ～。」
　だがこの女神はこの時は夢にも思っていなかった。数日後、とある転生者によって「異世界に持っていくモノ」に指定され強制連行される羽目になるなどとは。
　そしてゴジラの足元に転送用の魔方陣が展開される。天使の足元にも同様の魔方陣が。

「あ、そういえば言い忘れてたわ。サキエルも一緒にあっちの世界にいって貰うから。貴方だけだと最悪の場合、核爆発なんて事になりかねないし。そうなったら目も当てられないからね。」
「そう言う訳で、僭越ながら私が貴方のメディカルケアやマネージメントを務めさせて頂きます。よろしくお願いいたします。」
「さぁ怪獣王ゴジラよ！願わくば貴方こそが魔王をも打ち倒すことを祈っています！さすれば神々からの報奨としてどんな願いでも1つ叶えて差し上げましょう！」
　アクアは厳かに神託を下す。その様は超越者と讃えるに相応しい神威を纏っていた。
「さぁ、旅立ちなさい!!」

ＶＳガバラ

広大な草原と蒼穹の大空。そして、幾らか離れたところに十五～十八匹ほどの蛙。蛙と言っても個体によっては四メートル級のものも居る。

「あのカエルが討伐対象のジャイアントトードというモンスターですよ。たしか今がちょうど繁殖期で、農家の家畜や場合によっては人間も捕食してしまう有害種です。まあ、肉は結構美味しいらしいですが」

ゴジラとサキエルは冒険者ギルドで無事に登録を終える事が出来た。その際、説明と説得に幾らか手間取って騒ぎになりはしたが詳しくは割愛する。

この急造凸凹コンビは肩慣らしも兼ねてひとまず討伐系のクエストを受ける事にしたのだ。それは『ジャイアントトードの大群と、それを統率していると思われる新種のモンスターをまとめて討伐せよ』といった内容だった。

アークウィザードと為ったサキエルの魔法『クールダウン』おかげで暴発のリスクは随分と軽減されたが、それにしても限度がある。相変わらず自力では制御不能の常時苦痛を伴う有様。半ば生けるコロナタイト状態であり、魔法による冷却を怠った場合、１０００℃近い超高体温によって周囲には尋常じゃ無い被害が及ぶ事になる。だがそれ以上に過剰なエネルギーを発散する必要があった。流石に直ぐさまとは行かなくても、いずれは蓄積許容量の限界を超え大爆発しかねないのだ。その場合の威力は、人類史上最大と謳われる水爆『ツァーリ・ボンバ』（広島型原子爆弾「リトルボーイ」の約３３００倍）にも匹敵、或いは凌駕するだろう。

と言うのがそのクエストを受けた主な理由である。ついでに言えば、ゴジラの闘争本能が特に強そうでは無いとはいえども一応は斃すべき怪獣の存在を感じ取ったのだ。更には報酬も中々に高額でもあった。

そう言う訳で、蛙退治である。

「そんな風に意気込んでたときが私にもありました」

そもそもこのジャイアントトードは物理攻撃こそ効きづらい（仮にも女神であるアクアの放つゴッドブローの直撃を受けても平然としていた）が、金属製の装備を着けていれば食べられない。駆け出しの冒険者でも装備を調え数人のパーティーを組めば安定して狩れる程度のモンスターである。

対するは怪獣王とまで謳われるゴジラ。二十分の一にサイズダウンしていようとも、その戦闘能力は規格外。更にボルテージの上昇に比例して体温が上がり続け、高熱を伴う濃密な魔力を放出するので周囲を否応なしに灼いていく。

サキエルが掛けた『クールダウン』の効果が切れて、ゴジラが戦闘モードに移行し咆哮を上げた瞬間、遁走の余地すら無く圧倒されていく。

「・・・まあ分ってはいましたが、やはり勝負や戦闘が成立する余地など微塵も在りませんね。」

文字通りにひっくり返ったジャイアントトードの群を眺めて思わずため息が出てしまう。取敢えず蛙にトドメを刺す為に呪文の詠唱を開始しようとしたところで

次の瞬間、咆吼が轟く。

「………………!!……………………………!!!」

その咆吼の主こそは、魔王が神器を以て召喚した怪獣の一体。ガバラと呼ばれる蛙の怪獣である。頭部には角が生え、鋭い爪や牙を有し、全身の疣からは強毒性の粘液を分泌している。その体躯は十五メートルにも及ぶだろう。

召喚された怪獣達の中では特筆するほど戦闘能力を有している訳では無いが、暇さえ在れば人間や弱小モンスターを遊び感覚で殺す残虐な性質を有している。今も両掌に人間を握りしめていた。

おそらくはジャイアントトードの討伐を請け負った駆け出し冒険者なのだろう。しかし、まるで落雷に打たれたかの如き見るも無惨な

有様と成り果てていた。それでも尚、彼等は未だ生きている。否、嬲る為に敢て生かされているのだ。
だが、ガバラは鹵獲していた冒険者達をあっさりとうち捨てる。そして、怖じ気づいた己を鼓舞するかのように再度咆吼した。
「…………………!!!」
「????????!??????????????!」
ゴジラは見え透いた虚仮威しなど意にも介さず咆吼をあげ、その身体を赤熱させていく。赫灼(あか)く、紅焔(あか)く、緋炎(あか)く。
ガバラは一瞬後退るが、今更逃げ出したところで無駄というのは理解している為、半ば自棄に為って突貫してくる。
バーニングゴジラはそのタックルを真っ向から受け止めるが、流石に三倍もの体格差は如何とも為難く、弾き飛ばされて倒れるような無様は晒さなかったものの後退させられてしまう。
「……………!」
ガバラは即座に掴み掛って、バーニングゴジラの高体温に炙られながらも掌から強力な電撃を放つ。その威力は魏怒羅の『サンダースパーク』に匹敵する程だ。
「?????????!」
ガバラは此処が勝機と見たのか、一気に押し倒してマウントを取ろうと覆い被さってくる。だが、次の瞬間にはガバラは吹っ飛ばされて倒れ伏していた。
「……?…………??!」
ガバラは少しの間呻き声を上げた後に、何故自分が斃されたのか理解が及ばないままに絶命した。

ガバラの躯はボロボロと音をたてて崩れていき、同質量の魔力の結晶(マナタイト)体に成り果てる。
「――――」
バーニングゴジラは不満げに呻る。相手がもっと骨のある強敵だったのなら盛大に勝鬨を上げたのだろうが、はっきり言ってガバラ

は弱すぎた。
「いやいや、今の貴方を基準にしてしまえば大抵の相手は雑魚になっちゃいますよ。まさか体内放射一発で此処までだなんて想像以上です。」
今のゴジラは自分自身でも制御不能なレベルでＧ細胞が活性化しており、その為に殆どの能力が通常時とは比べ物にならない程に上昇している状態である。
バーニングゴジラを中心に地面が融解し、直径にして１５メートル程度のマグマ溜りが出来ていた。１００万度の放射熱線を衝撃波として全身から放出したのだから、至近距離で直撃を受けたガバラが一撃で斃れるのも致し方の無い事であろう。

とにかく、この世界での最初のクエストは無事に達成できた。後はギルドにその事を報告して、魔法で冷凍した蛙肉を引き取って貰うだけである。
蛙肉一匹につき手取りで５０００×１８にクエスト達成報酬の１００万。合計で１０９万エリスの収入となった。サキエルの手持ち分も併せれば暫くは生活費の心配をせずに済むだろう。
マナタイトはゴジラのものとなった。この世界ではゴジラの主食である放射性物質など、仮に有ったとしてもまずお目に掛る事など無い。その代わりと為り得るものがこの魔力の結晶体なのである。元はガバラだったため、品質はそう悪いものでは無く、何より大量。値段を付けるとするなら数千万はするだろう。そう考えるととんでもない高級食材と言えるのかも知れない。もっとも、睡眠だけでもある程度のエネルギーは生成できるので必要不可欠という訳では無いのだが。

ＶＳアーネス

この世界に来て３日目。ゴジラとサキエルはギルドの酒場に居た。クエストを受けようにも掲示板には碌なクエストが無い。と言うか、ギルドの職員からは

「このアクセルは駆け出し冒険者の街です。この近辺のモンスターを軒並み狩り尽くされて生態系を壊されてしまいますと、この街の冒険者達の仕事が激減し、更には初心者育成の機能も失われてしまいます。なので低級モンスターの討伐は可能な限り控えて頂きたいのです。」

等と釘を刺されてしまった。しかしゴジラとしては、こうして人間達に囲まれ視線に晒され続ける事は尋常では無いストレスと為る。ぶっちゃけ、この際贅沢は言わないからそこらの雑魚相手に憂さ晴らしでもしようかと考え始めていた。

「ダメですよ？・・・はぁ、仕方有りませんね。少し遠出する事になりますが、大物を狩りに行きましょう。」

サキエルはそう言いながら掲示板のクエストから手頃なものを見繕う。他の冒険者達が受ける事すら躊躇う高難易度のクエスト、俗に塩漬け物件と呼ばれる依頼からいくつかをピックアップする。

アクセルの街近くの山の湖に棲む大物賞金首クローンズヒュドラの討伐。懸賞金額十億エリス。

縄張り争いをしているマンティコアとグリフォンをまとめて討伐。報酬は五十万エリス。

濃緑色の人食い巨人型モンスター討伐。※魔王軍が召喚した怪獣の一体である可能性高し。報酬は五千万エリス。

魔王軍の手先と思われる、２０メートル以上の巨大怪獣３体の討伐。イカ型、カニ型、カメ型。報酬は一億二千万エリス。

ほかにも高難易度の討伐系クエストは幾つかあるが、ルーシーや安楽王女など特に急を要する訳では無く、何よりゴジラの琴線に触れる

ようなクエストでは無いので一先ずは候補から除外した。
この中でも最も急を要するクエストは、人食い巨人（恐らくガイラであると思われる）の討伐であろう。怪獣共の中では弱い方で、旧式のメーサー殺獣光線車で死にかける程度の実力だが、それでも中級魔法では大したダメージにはならないし、何より２５メートルのサイズはシンプルに脅威だろう。
そもそも、怪獣達は魔王が神器を使って異世界から召喚した存在。故にこの世界の理の内側の存在である者では斃す事が出来ない。其れが出来るのは世界の外側から送り込まれてきた日本人転生者達と天使族、そして最強の鬼札であるゴジラくらいであろう。或いは、勇者の血と聖剣を受け継いだ幼き姫君ならば可能かも知れないが。

？　？　？　？　？　？　？　？　？

アクセル近辺の山岳湖、黄昏時にて。
この場所、この時刻こそガイラの本領を最も発揮できる。
今宵も野生の本能に従い、人間を探し、喰らい、満たす為に。――
――さあ、ヒト狩り征こうか

ガイラは獲物を求めて街道沿いの湖の底で通りがかる人間を待ち伏せようとし、既に商隊が野営をしていた。未だそれなりの距離がある上に、いよいよ深夜という時刻。未だ此方の存在には感づかれていない。
人間共の中からは大きな力を２つ感じる。本来なら自分を斃し得る筈なのだが、本能が全く警鐘を鳴らさないあたり、この世界の人間ばかりと判断する。
しかし気になるのは別方向からも強大な力を感じ取れる事だ。そ

ちらは恐らく高位魔族だろうか。地獄の住人である悪魔は怪獣とも戦える。注意が必要と判断する。まあ、邪魔をするなら諸共に喰らうまでだが。

ガイラは其程深くは考えずに、しかし一応の警戒はしながら商隊に襲いかかる。何しろ久方ぶりにありつけた山盛りの御馳走である。お預けなど我慢できるはずも無かった。

「☒☒☒☒☒☒☒☒!!」

選取り見取り、さあどれから喰おうか。そんな状況の中、肩に妙な黒猫を乗せた朱いチビが嬉々として杖を向けてきた。

「おお!?なんという巨大なサイズ！　我が爆裂魔法を撃ち込むに相応しい相手が、こんなに早く私の前に現れるなんて！ふふっふはは、ハーハハハハ!!」

どんな魔法だろうとどうせダメージにはならないが、自分に向かって放たれるのは鬱陶しい。ましてや今は食餌を為に来たのだから尚更に。

呪文を詠唱し終える前に叩き潰すに限る、と言わんばかりに拳を振り上げ、しかしその拳が件の少女に振り下ろされる事は無かった。何故なら、その前に事態が急変したから。

『カースド・ライトニング』!!・・・まったく、生憎だけどその紅魔族はともかくウォルバク様を殺される訳にはいかないんでね。これ以上やるってんなら、不本意だけどあたしが相手をしてやるよ、ガイラ。」

「――――――――!」

「ちょっと！私がこれから格好良くキメる場面でしょう、ここは！空気を読んで下さい！」

「すっこんでろなんちゃって紅魔族。邪魔だ。」

!!不意打ちを食らい、少々シビれていたガイラだが漸く感覚が戻ってきた。

「??????」

ガイラは今し方雷撃を放ってきた魔族を見つけ、激怒する。怒りのまま??????に飛翔する魔族をはたき落とそうと掌を振るうが、避けられる。

「はっ！そんな雑な大振り当たるもんか！『クリムゾン・レーザー』!!」
ガイラは魔族の紅い熱線をまともに食らってしまい、思わず悲鳴を上げる。しかし、即座に反撃を試みようと視線を走らせるガイラはソレを見つける。
見つけて、しまう。
赫灼(あか)く、紅焔(あか)く、緋炎(あか)く耀く破壊の権化を。
「???????!!
「間に合ったと思いきや、どうやら妙な状況になってますね。何故ガイラと上位悪魔が戦っているんでしょう？」
「はっ！まさかこんなところで神のパシリなんかと出くわすとはねぇ！」
サキエルの眉がキリキリとつり上がっていく。
「浅ましい悪魔風情が言ってくれますね。良いでしょう、アナタは私が葬ってあげます。ゴジラ様はガイラを、っと言うまでもありませんね。」
「はっ。あんた一人でこのあたしとヤりあおうっての？保護者に助けて貰わなくてもいいのかい？」
「ええ、必要ありませんから。」
サキエルは微笑を浮かべながら、その眼には一切の熱は無く。対する悪魔アーネスも憤懣やるかたない有様。
「・・・上等。偉大なる邪神ウォルバク様に仕える上位悪魔として、天使如きに虚仮にされたまま引き下がる訳には行かないねぇ。そっちの方こそ、天界に強制送還してやるよ！」
そう言いながらも、アーネスは中級魔法による早撃ちと、高速飛翔での攪乱を仕掛けてくる。一撃の威力よりも、タメが少なく迅速に繰り出せる中級魔法で、とにかく魔法を撃たせないようにしつつも、大技と叩き込む隙を狙っている。

天使は神の眷属であるが故に、ナチュラルに神聖魔法を行使できる。サキエルもその例の漏れず、ある程度なら神聖魔法を使う事が出来る。だが本職でないぶん、どうしてもタメや詠唱を必要とし、この弾幕の中ではその暇は無い。ならば

鉄拳聖裁（HALLELUJAH）

「がはっ!?天使でアークウィザードがよりにもよって、拳が奥の手だと・・・?!」

鼻血をまき散らし仰け反るアーネスに、サキエルは容赦なく追撃を加える。

「我らは神の代理人　神罰の地上代行者　我らが使命は　我が神に逆らう愚者を　その肉の最後の一片までも絶滅すること――――　Ａｍｅｎ」

祈りを込めて十字を切ることで『グランドクロス』を発動し、アーネスは地に墜ちる。

「ぐうぅ!こ、こうなったら、せめてウォルバク様を」

黒より黒く、闇より暗き漆黒に、我が真紅の混淆に望み給もう。覚醒の時来たれり、無謬の境界に堕ちし理、無業の歪みと成りて現出せよ!踊れ、踊れ、踊れ、我が力の奔流に望むは崩壊なり。並ぶ者なき崩壊なり!万象等しく灰燼に帰し、深淵より来たれ!

そこに、まるっきり空気という物を読まず、美味しいところを掻っ攫っていこうとする紅魔族の詠唱が響き渡る。

「これが人類最大の威力の攻撃手段!!これこそが!究極の攻撃魔法!『エクスプロージョン』!!」

ちなみに、バーニングゴジラはサキエルが反撃しだした頃には既にガイラを斃していた。

アクセル

ゴジラとサキエルはギルドへの報告のために一旦アクセルの街に帰還することにした。商隊の人達も一緒である。

人間嫌いのゴジラは、意外にも渋る事無くすんなりと承諾した。どうやら爆裂魔法を放った紅魔族に興味が湧いたらしい。

確かにあの一撃は凄まじかった。とにもかくにも一発こっきりで、撃ったら倒れるのでお世辞にも実用的とは言い難い。しかし、その威力だけなら赤色熱線にもそう劣るものでは無い。

加えて言うのなら、邪神ウォルバクの片割れである魔獣を従えているのだ。・・・そのネーミングセンスは本当にどうかと思うが。

基本的に人々を十把一絡げに『人間』としか認識しないゴジラが、他者と一応の区別を付けているくらいには評価している（今の処ゴジラが他者と明確に区別している人間は女神アクアと天使であるサキエルを除けば、恐竜だった頃にラゴス島で見え怪獣と成って再会したさいに直接葬り去った新堂　靖明と、超能力者の三枝　未希の２名のみ）らしく、ちょむすけに懐かれても邪険にはせず、すり寄られて困惑するというレアシーンを拝む事が出来た。

しかし、いかにゴジラとサキエルが同行しているからとてモンスターに全く出くわさないとも限らない。

そう、一行は知らず知らずのうちに、自らモンスターのテリトリーに足を踏み行ってしまったのだ。

それは、さながら飛んで火に入る夏の虫の如く。

或いは、甘く蕩ける蜜に惹かれた虫の様に。

である以上、冒険者達の末路は決定した。

迷い込んだ哀れな羽虫は、溶解し喰らい尽くされる。

今、街道の付近にある湖の畔で休息を取っている。商隊の中には護衛役として雇われた冒険者や二人の紅魔族以外にも一般の乗客が乗り合わせているし、馬だって定期的に休ませなければバテてしまう。

湖畔の近くにある森の中にソレは居た。目の良い者なら畔からでもギリギリで見えるかどうかの位置。一本の樹木に寄りかかるように座り込む、痩せ細った緑の少女。

その少女は脚や腕に血の滲んだ包帯を巻いていて、身動ぎする度に顔を顰め、何かを訴えかけるように上目遣いで見つめてきた。並大抵の冒険者や旅人であれば慈愛の心を抱かずには居られないだろう微笑みを浮かべて。

もっとも、今少女の目の前に居る存在は並大抵とは到底言えない、埒外の破壊神であるのだが。

「・・・・・・・・・・」

「――――――――――」

両者は暫し無言で見つめ合う。

件の少女は、身動ぎは恐怖故の震えに換り、包帯に滲む体液は血糊のような何かでは無く脂汗になり、浮かべる微笑は完全に引きつっていた。

このワンシーンだけを視るなら少女に同情して身を挺してでも庇おうとする勇敢な冒険者（ロリコン）も居るかも知れない。

だがしかし、その少女の名は『安楽少女』。喰人性の植物型モンスターであり、人を引き寄せてやまない諸々の要素は全てが擬態であり演技なのだ。

とは言え、それらの事情はゴジラの知った事ではないし、どうでも良い事である。

人間とて言ってしまえば数多居る生物種の一つ。極ありふれた生存競争で、真っ当な理の内側の出来事である。

ゴジラは安楽少女を数秒程観察した後、あっさりと興味を失い湖へと去って行った。

「――――ッブネ――！・マジで死ぬかと思ったぜ、クソッタレ!!」

プレッシャーから解放された反動からか、地金を晒した状態で盛大

に毒づく安楽少女。
「あ～あ。ったくよー、せっかく良い感じで養分になってくれそうな人間が沢山いるってのに、んだよアレ?!」
もしゴジラが沈静化しておらずバーニングモードであったのなら到底無事では済まなかったのだから、この安楽少女はまだ幸運であると言える。
「「――――――――――」」
本人の、油断による間抜けさを考慮しなければ。
繰り返すが、商隊の中には護衛役として雇われた冒険者達が居る。そして、この三人は周囲に危険なモンスターが居ないかを偵察する役割を請け負ったのである。勿論、先程の光景もバッチリ目撃している訳で
「・・・・・イマノハ、ナカッタコトニ、デキマセンカ・・・?」
「あんなん見た後でそんな媚売りが通じる訳無いだろ?往生・・し・・・」
ソレを聴いた安楽少女は、観念するように瞑目し、両手を胸の前で組んだ。
「・・ソウ、ダヨネ。ケッキョク、ワタシハ、モンスターダモンネ・・・。モシモ、ウマレカワレルノナラ、ツギハ、ホンモノノニンゲンダト、イイナア・・・。」
涙を浮かべながら、精一杯に微笑んだのだ。
安楽少女にとっては起死回生をかけた渾身の一手。例え演技であると知られていても、尚も討伐を敢行出来る者など居ない。そう確信できる程の手応え。
(いける!やっぱ人間ってバカだわｗｗｗこのまま押し切って、あわよくば虜に・・・!?)
「させませんよ?」
背後から首筋に掌を添えられ、耳元で囁かれた。躰が硬直して声も出せないのは呪縛魔法を掛けられたからと言う訳では無く、自身の生殺与奪権を完全に掌握されたのを理解してしまったからである。
サキエルは紛れもない大天使。天使達は神の眷属だけあって幾つかの特権を行使できる。例えば、僧侶や聖騎士に為らずとも神聖魔法

を行使出来る。或いは、相手の邪気を感じ取る事で嘘を見抜く。
「今回は見逃してあげますが、あまりおいたをしてはいけませんよ？良いですね？」
安楽少女は必死に為って首を縦に振る。
「聞き分けが良くて大変よろしい。」
これ程までに恐ろしい猫撫で声は初めて聴いたし、この先の生涯において聴く事は無いだろう。それは安楽少女のみならず、その場に居合わせてしまった全員の総意でもあった。
安楽少女にとって、先のゴジラは良くも悪くも天災に等しい存在であったが、このサキエルは冷徹な裁定者と言える。もし一片でも邪念を抱いていたなら容赦も慈悲も無く刈取られていた。
ともあれ、一先ずは生き存えた事に安堵する。だがこの時点では誰も予想していなかった。この安楽少女が、後にあのように成り果てるだなんて。

？　？　？　？　？　？　？　？　？　？

アクセルの街はベルゼルグ王国の中では魔王軍の城砦から最も遠い位置にあり、周囲に生息するモンスターも弱い為、駆け出し冒険者の街としての側面が強い。
だからなのか、神々によって送り込まれてきた転生者は先ずこの街に現れる。
そして、今まさに降り立とうとしている者が二人。より正確に言うのなら、一柱の女神と一人の少年がこの世界に降り立ったのである。

水の女神

ゴジラとサキエルはギルドを訪れていた。ガイラ討伐の報告と報奨金の受け取り、ついでにマナタイトの売却のためである。ガイラを斃して得たマナタイトの質はお世辞にも良いとは言えず、そこいらの魔道具店で投げ売りされている物と大差ないレベルの物だった。量だけは無駄に多いから、全部を一度に消費すれば爆裂魔法一撃分の魔力は賄えるかも知れないが。

ギルドの職員が金を用意するまでの間に次の獲物を見繕っていたが、不意に強大な力を感じ取る。

それは魔力というにはあまりに強大すぎた。甚大で、重厚で、濃密で、そして清浄すぎた。それはまさに神気だった。

「ではクエスト達成の報酬と引き取ったマナタイトの金額、併せて七千五百万エリスになります。」

サキエルが金を受け取った丁度その時、ギルドに見知った女神が少年と共にやって来た。

「いいかアクア、一先ずは冒険者ギルドへの登録と最低限の装備を調えられる程度の軍資金の調達、そして宿泊場所の確保までは今日中に進めるぞ。」

「分ったわ。とりあえず私も冒険者として登録すればいいのね？」

「そういう事だ。よし、行こう！」

二人は意気揚々と受付の列に並ぶ。しかしこの二人には、冒険者として登録するには致命的に足りない物が在った。

受付嬢のルナが、ある意味死刑宣告にも等しい言葉を吐く。

「では登録手数料が掛りますが大丈夫ですか？」

そう、この二人は全くの無一文だったのである。

この光景を見ていたサキエルは一瞬見なかった事にしたい衝動に駆られたが、流石に見るに見かねて助け船を出すことにした。

「あの、アクア様、宜しければ私が支払いましょうか？」

「え？ってサキエルじゃない！よかったー、アナタが居てくれて助かったわ。あのねあのね、私、女神なのにそこにいる冴えないヒキニートに無理矢理連れてこられたの！だからお金も何も碌に持ってないから困ってたのよ。だからお願い、お金貸して！」
「え、ええ。構いませんよ。」
一万エリス紙幣一枚をアクアに渡す。正直に言えば一100000束くらいポンと渡す事も出来た。つい先程多額の収入を得たばかりだし、自分はともかくゴジラに到っては「金？何ソレ、美味いのか？」状態でほぼ使わないのである。だが此処で甘やかしては碌な事にならないだろうし、本人の為にも為らない。
「ふふん、どーよ？これが世界中で数多の信者達から崇拝されるアクシズ教団の御神体、水の女神アクア様の仁徳ってやつよ。なんならこの私を崇め奉り、アクシズ教に今すぐ入信してもいいのよ？」
一万程度を偶々居合わせた部下から貰っただけなのに、もの凄いどや顔をかます女神様。しかし同行して来た少年からのリアクションは無く、怪訝に思った両者が目をやると
「――――――――!!?!?」
腰を抜かして、絶句していた。無理も無い。日本のオタクであるなら彼の怪獣王を知らぬはずは無く、そのゴジラと何の心得も無いまま対面してしまったのだから。

ゴジラ。地球で最も有名な大怪獣であり、長きにわたって築き上げた数多の功績により『怪獣王』の尊称を冠する。ＶＳシリーズは「特撮冬の時代」と呼ばれるほど、特撮作品の放送が激減していた時期でありながらも観客動員数は二百万人越えは当たり前。『ゴジラＶＳモスラ』に到っては驚異の四百二十万人と言う記録を打ち立てた。また『ゴジラＶＳデストロイア』の製作が発表された時には世界中で大ニュースになる程騒がれ、告別式や葬式が行われた。

二十分の一にサイズダウンしていようとも、生きている本物のゴジラと真逆の遭遇を果たして驚かない日本人など居るだろうか？否、居

る訳が無い。
　まあゴジラの方はひ弱なタダの人間になど興味も無いのだが。
『それで、何故お前が此処に居る？さっき無理矢理連れてこられたと言っていたが、何か想定外の問題でも起きたのか？』
「あ、そうなのよ！ねえ二人とも、聴いて聴いて！あのね
「っておい駄女神！コレは一体どういう事だ!?ちゃんと説明しろ!!」
　その人間は漸く動き出したと思えば女神に詰め寄り詰問し出す。そこへサキエルが仲裁に割って入る。
　一同はギルドの隅に移動し、サキエルが認識阻害の結界を小規模展開する。盗賊職の潜伏スキルに近い効果があり、コレで内緒話を憂い無く行えるらしい。効果に対して消費魔力が多めで持続時間が短いのが難点なので、普段からあまり多様は出来ないとの事だ。
　女神とサキエルは人間に一通りの説明をした後、お互いの近況を報告し合う。
「・・・つまりアレか？ぶっちゃけるとお前の管理不行き届きが招いた事態って訳か？さっきの話を聞くに、今の魔王だって元はと言えばお前がチート持たせた日本人転生者みたいだし。」
「何て事言うのよクソニート。私はあくまで特典を与えて送り出してるだけよ！だって言うのにモンスターにおかしな名前を付けたり、生態系を大きく変えてくれたり、変な言葉や文化を流行らせたり、挙句の果てには魔王に成り代るだなんて。まったくもう！どいつもこいつも自重ってものを知らないのかしら？」
「お前がいってんじゃねぇ!!」
『・・・どうでも良いが、貴様等にじゃれ合っている余裕などあるのか？』
「そうですね。アクア様が佐藤　和真さんの転生特典として認められた以上は、恐らく佐藤　和真さんと共に魔王討伐を成し遂げなければ天界に帰還させてもらえないでしょうし。」
「？・・・・はっ、そうだわ！カズマにはどんどん強くなっていって貰わないと、私が何時まで経っても天界に帰れないじゃない！ほらカズマ、ぼうっとしてないで早く受付で冒険者の登録をするわよ！」

大方の予想通り、小僧は最弱職の『冒険者』になった。小賢しく運だけはやたら良いが、その他のスペックは平均。伸び代も大して見込めないだろう。
「では次の方、って!?はあああああっ!?何ですか、この数値は!!知力が平均より低いのと、幸運が最低レベルですが、それ以外のステータスは殆どがゴジラ様と同等って!?事に魔力については凌駕していますよ!!」
それを聴いた他の人間共が一斉に騒ぎ出した。
「・・・なん・・・だと・・!?」「頭のおかしいイタイ娘じゃなかったのかよ!?」「マジかよ・・・まさか本当に?」「・・・・・あれ、そういうのって普通は俺のイベントじゃね?」
「え、そ、そう?いやー、まあ私クラスの女神ともなれば、これくらいはね?」
女神は暫し懊悩していたが、回復と支援がメインでありながらも前衛もこなせる万能職『アークプリースト』と成った。確かにこの女神が全力でバックアップすれば貧弱な小僧でもそこそこ戦えるようになるかも知れない。
「「「「冒険者ギルドへようこそアクア様。スタッフ一同、今後の御活躍を期待しております!」」」」
そうして一同は、貧弱小僧を強化する為に討伐クエストを受けたのだった。

レベリング

この世界のあらゆる存在はその体内に魂を秘めており、他の存在を殺したり食べたりすることでその者の魂の記憶の一部を吸収し、体内に貯め込む性質を持っている。そしてそれらを一定以上貯め込んだ生物は、ある日突然、急激に成長することができる。所謂、レベルアップと言うやつだ。

ゴジラは現在レベル４。ガバラとガイラを斃した割にはあまり上がっていないが、ベースとなっている器の規格が違う為に、必然的にレベルアップに必要な経験値も膨大なものとなる。代わりと言っては何だが、成長の上限は無く、戦い続けていけば何処までも強くなれる。同じレベルでもこれがカズマであれば雑魚モンスター数匹であっさりレベルが上がるだろう。みっちり鍛え上げていけば、何れは幹部級の相手にもそれなりに食い下がれるくらいには強くなれかも知れない。

現在、そのカズマはアクセルの郊外にある平原でレベリングに勤しんでいる。と言っても、残りの八千エリスで用意出来た武器は量産品と思われるショートソードが一つだけ。アクアの方はそのままではあるが、此方は心配など不要だろう。駆け出し冒険者の街ではオーバースペックと言っても過言では無く、カエル程度では相手にも為るまい。そもそもアクアの場合、既にしてステータスがカンスト状態且つアークプリーストの全魔法を習得済みなので、レベルを上げる事の意味が薄い。女神は総じて、レベルやステータスでは無く信仰の如何によって力の出力が上下する。故に強くなりたいのなら、布教活動に勤しみ信仰の基盤を盤石なものにした方が良いのである。

麗かな蒼天の下、汚い高音の悲鳴が響き渡る。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝!!た、助けてええええ！喰われるうううううっ！」

「・・・まあ、こうなりますよね。」

平和呆けした現代の日本人、それもケンカすらまともにした事が無

さそうな引きこもりの少年である。武器一つ与えられただけで、いきなり実戦に放り込まれて相手を躊躇いなく殺せる方が稀であろう。
その様子を離れたところから見ていたアクアは腹を抱えて大爆笑。ゴジラは興味すら無いのか、見向きもせずに日なたぼっこに興じている。
「『パラライズ』。さあ、今のうちにトドメを。」
「あ、ありがとうございます！流石、天使様。どこぞの元なんとかにはぜひ見習って欲しいところだ。」
「元って何!?ちゃんと現在進行形で女神よ私は！いいわ、見てなさい！カエルの群を華麗に一掃して見せてやるんだから！」
しかしこの女神、幸運値が最低かつ知力も低めなのである。オブラートに包んだ言い方をするなら足元をすくわれやすい性質の持ち主であり、身も蓋もない言い方をするならバカで間抜けだ。
「神の力、思い知れ！ゴッドブロー!!」
単身、拳に神気を纏わせ突貫する女神。だがこのカエル、打撃系の効果は薄いと予め聴いていた筈なのだけれど。まあ相手はたかがカエル三匹。多少相性が悪かろうとも、スペックの差でねじ伏せられるだろう。
「ゴッドブローとは女神の怒りと悲しみを乗せた必殺の拳、相手は死ぬ！」
アクアの拳は三匹のどれでも無く地面に突き刺さり、広範囲の液状化現象を引き起こした。そしてカエル諸共、自分で拵えた泥沼に沈む水の女神。
数分後、サキエルによって救出されたものの泥だらけでめそめそと泣いているアクア。カエルにトドメを刺しながらその光景を見ていたカズマは心底後悔していた。なんで自分はよりにもよってこの駄女神を転生特典に選んでしまったんだろう、と。
パーティーメンバーの総戦力だけなら、無敵とさえ言えるのに。

紅い陽が地平の彼方に沈もうという頃、カズマは本日十五匹目とな

るカエルを仕留めた。
「・・・ハァ・・ハァ・・し、死ぬぅ。これ、以上は・・ハァ・・本当、無理・・・」
「まったく、カズマったらしょうが無いわね―。ま、ヒキニートにしては頑張った方かしら―？」
ちなみにアクアは、サキエルが『クリエイト・ウォーター』で躰を清めてあげたので、もう泥だらけでは無い。
ゴジラ以外の三人はアクセルのギルドに向かう。
ゴジラは寝床にしている湖に行った。余談ではあるが、その湖は最近水質が悪化していてワニの群が住み着きだしていたのだが、ゴジラの咆吼であっさりと逃げ散っていった。水もサキエルが浄化した。たまに湖底に置いてあるマナタイトを狙う輩が来たりもするが、ゴジラにとっては悪くない住居となっている。
肉の買い取りと討伐報酬を合わせて三十七万五千エリスを受け取り、併設されている酒場で晩飯を食べる。特にカズマは無茶なレベリングを課せられた所為で疲労困憊。唐揚げ定食の特盛りを一心不乱にがっついている。
カズマが今日一日この世界でやった事を文字に起こして箇条書きにすると、ＲＰＧ等では至極ありふれた行為であるのだ。サキエルとゴジラのおかげで命だけは保証されていたのだから、マシとさえ言える。実際に、そのおかげでレベルがいっきに１３にまで上がったのだから。

三人が食事を終え、食後の余韻に浸っていると、一人の騎士らしき者が随分と慌てた様子でギルドに駆け込んできた。
彼の騎士曰く、魔王軍に２つの大きな動きがあったらしい。
一つは、魔王城の周囲一帯に未知の結晶体が乱立し、今までのものとは別種の極めて強固な結界に覆われたとのこと。
もう一つは、幹部の一人であるデュラハンのベルディアが大量のアンデッドを引き連れてどこぞに出立した。しかも怪獣と思しき存在、三頭双尾の黄金竜と共に。

ＶＳゲソラ・ガニメ・カメーバ

翌日、クエストに行く前にカズマの防具の類いを一通り揃える事にした。ハードレザーの胴衣に金属製の籠手と脛当、その上に中丈のマントを羽織っている。

「少しはまともな冒険者に見えるようになったじゃない。ジャージのままじゃファンタジー感ぶち壊しだものね―。」

「せっかく魔法が使える異世界に転生したんだ。剣は元より、魔法は是非とも覚えたい。で、スキルの習得ってどうやるんだ？」

「和真さんは『冒険者』ですから、まず誰かに教えて貰う必要があります。直接見て、詳細を聞く事でそのスキルが習得可能になります。ただ、習得に必要なポイントは本職に比べると幾らか多めになりますが。」

例えば中級魔法を習得しようとした場合、本職の魔法使いであれば必要なポイントは１０となる。だが『冒険者』の場合、個人差はあるが凡１．５倍のポイントが必要となるのだ。おまけに魔力値が低いから魔法の威力も撃てる回数も高望みは出来ないと来ている。

結局カズマは中級魔法の習得は取敢えず諦めたものの、魔法を使う事への未練を断ち切れず初級魔法を教わった。アクアにも何か教えて貰おうと暫く思巡していたが、しょうもない宴会芸辺りを披露しそうな予感でもしたのか止めたようだ。

「他に何かありませんかね？出来れば習得にあまりポイントを使わないで、それでいてお得な感じの。」

「ん～、そうですね・・・では、これなどはどうでしょう？」

そう言ってサキエルが披露して見せたのは『魔力収束』のスキル。ゴジラは放射熱線に螺旋の回転を加える事で貫通力を高めて放つのがスパイラル熱線な訳だが、それがこの世界に転生した所為で明確にスキル化されたのである。

「おお！コレを習得すれば、例えば螺旋丸みたいな事も出来たり・・・?!」

「その螺旋丸が何なのかは分りませんが、巧く使う事が出来れば初級

魔法にも其れなりの威力を持たせる事が出来るでしょう。」

？　？　？　？　？　？　？　？

？　？

その後、ゴジラとサキエルは二人で討伐クエストに向かう事にした。アクアとカズマはクエストの内容が怪獣三頭の討伐だと知るや

「い、いや～俺達にはちょっと速いかなーと。って訳で、今日も平原でカエル相手にレベル上げだ、いくぞアクア！」

「そ、そうね！まあ、私は余裕だけど、仕方ないからカズマさんに付き合ってあげるわ！」

今の二人であれば、確かにちょうどお手頃な相手ではあるだろう。カズマは金属の防具がある為、カエルは補食を嫌がるだろうし、昨日さんざん戦ったのだから退き際も弁えている筈だ。アクアに関しては最初から心配要らない。何故なら普段から身に纏っている羽衣は、強力な耐久力を持ち、あらゆる状態異常を受け付けず、様々な魔法がかけられている正真正銘の神具だからだ。

そんな訳で、憂い無く本来の仕事に専念できる。ギルドの情報によると、三頭の怪獣は森の奥深くで目撃される事が多いとのこと。その森は本来ならブラッディモモンガ、スライム、一撃ウサギ、コボルト、ゴブリン等の多数のモンスターが生息する中級以上の冒険者にとっては美味しい狩り場であった。だが怪獣が住み着いた所為でギルドは森への立ち入りを禁止。冒険者達の鬱憤はたまりにたまって爆発寸前の状態である。

しかし元から生息していた雑魚モンスター達にとってみれば無上の災難であろう。タダでさえ三頭の脅威に逃げ惑っていた処に、其れを遙かに凌ぐ怪獣王と大天使が揃って現れたのだから。

「ハアアァ『ダイアモンドダスト』！」

サキエルは有象無象の軍勢に向けた掌から冷気の波動を放ち、全て

を凍結させた後に指をパチンと鳴らし破砕させた。これで周囲一帯のモンスターは一掃されたようだ。

「――――――――！」

「ふむ、漸く本命のお出ましですか。」

先ず現れたのは大イカ怪獣ゲゾラ。デカくて冷たい以外にはコレと言った能力を持たず、炎熱に極端に弱い怪獣だ。

だがこのゲゾラは、その冷たさが尋常では無くなっていた。数値にして―２００℃。並大抵の相手であれば、体表面に触れただけで凍傷を負う。

それ以前に３０メートルと言う大きさと、２万５千トンと言う重さは対峙する者に恐怖すら抱かせる。デカさはそれだけで強さとなるのだから。

その相手がゴジラで無ければ。

「??????」

ゲゾラは、ゴジラの覇気に脅威を感じたらしくイカスミを吐き掛けてきた。液体窒素を下回る超低温の墨である。その上、非常に高い粘性を誇る。

ゴジラは熱には凄まじい程の耐性を持つものの、冷気には比較的弱い。実際、スーパーⅩⅢには氷漬けにされ活動停止に追い込まれた事もある。

つまりゲゾラのイカスミは、ゴジラの弱点を的確に突く事が出来る攻撃手段なのである。

真面に浴びせる事が出来たのなら、の話だが。

「『ストライク・エア』!!」

サキエルの魔法によってイカスミは吹き払われ、ゲゾラは致命的な隙を晒す。

「??????」

ゴジラのスパイラル熱線によって眉間を撃ち抜かれたことでゲゾラは絶命した。

だが、実際の戦場においては勝利を確信した瞬間こそが最大の窮地。敵はゲゾラだけではないと言う事実を、刹那の間失念していた。

その代償を支払うかのようにゴジラは豪速で飛来してきた特大の火球に呑み込まれて爆焔に包まれる。
「!?」
サキエルが火球が飛んできた方角に振り向いた瞬間、地中から巨大な鋏が突き出てきた。咄嗟に飛翔する事で回避はしたものの、今度はサキエルに向かって火球が飛んでくる。更には地中から現れたガニメからのバブルブレスの挟撃。
だがその程度手あっさりと堕とされる程、大天使の称号は安くない。人間の肉体では耐えきれないであろう程の超高速旋回機動を以て躱してのける。そして
「????????????」
当然、ゴジラがこの程度の攻撃で斃れる訳がない。況してや熱焔攻撃とも為れば、半端なものでは逆効果でしか無い。
「＊＊＊＊＊＊＊!!」
火球の砲撃主であるカメ―バも負けじと咆吼しかえし、今度は流動的な熱焔を吐きかける。
だがゴジラは其れもまた吸収し、熱線に上乗せし、バーンスパイラル熱線として放ったのだ。かつて、満身創痍の状態だったとはいえどスペースゴジラとＭＯＧＥＲＡの両者を爆散炎上させた熱線である。カメ―バが耐えられる道理は無く、同様の末路を辿ったのだった。
ガニメも既に、サキエルの『ライト・オブ・セイバー』で鋏を切り落されていて、後はトドメを刺すだけの有様だ。
「済みません。私、カニはちょっと苦手なんです。『フォトン・レイ』!!」
サキエルはその掌から極彩の光砲を放つ。その耀は、まるでメカゴジラのメガ・バスターを彷彿とさせる砲撃であった。
ガニメは断末魔の叫びを上げながら躯と化した。

強大な力というのは往々にして他の力持つ者を呼び寄せる。ある者は傘下に入り庇護を得る為、ある者は討伐し誉れを得る為、或いはその力を取込み利用する為。

そして、このモンスターも怪獣という災禍によって覚醒しようとしている。否、モンスターという呼称は正確ではない。かつてこの世界に送り込まれた日本人転生者、その一人が創り上げたロボットだからだ。

その機体は鋼鉄の２００倍の硬さを誇るキャタピラ状の装甲で、その両目からは殺人光線を放つ事が出来、５メートル程度の大きさなれど総数は１００体に及ぶ。ついでに言うなら、１００機全てにチートハーレム型リア充抹殺プログラムと自爆機能が組み込まれている。

そして、そのモゲラ（擬）を束ねる司令塔として作られた特別なロボットが１機。

とある世界線ではガイガンとメガロを相手に戦いを挑み、最終的には美事に撃退してみせた伝説的なロボット。

それら全てが、紅魔族の里にある研究施設の深奥より一斉に解き放たれようとしていた。

尖兵

三頭の怪獣を斃したバーニングゴジラとサキエルを視ていた者が居た。魔王軍の怪獣部隊が尖兵の1体、カマキラスである。迷彩スキルによって、姿や気配を周囲に溶け込ませる事で隠遁しているのだ。

カマキラスとて流石にこの場で奇襲を敢行する程に愚昧ではない。バーニングゴジラの耐久力と再生能力は、カマキラスの攻撃能力を圧倒的に上回っているのは明白だ。例え奇襲を成功させたとしても斃しきれずに、逆に斃されるのだと言う事くらい理解できている。

そして確信する。奴等こそが、占い師が予言した必滅、黒き灼熱と寄り添う青藍であるのだと。

故に、カマキラスは監視を一先ず3体の同族（昭和版）に任せて報告しにいく事にした。三頭双尾の黄金竜（キングギドラ）の元に。

？？？？？？？？？

一方その頃、アクアとカズマは新たなパーティーメンバーを募集していた。本当なら平原でカエル狩りをしたかったのだが、そのカエルが殆ど居ないのだ。

アクセル近辺のジャイアントトードは、ガバラという庇護者のおかげで他の怪獣達の脅威にもあまり曝されずに済んでいた。しかし、ガバラはバーニングゴジラの一撃で斃された。なので、大半は既に逃げるか隠れるかのどちらかである。

兎にも角にも目当ての獲物が居ない以上は、別の獲物を見繕うしかない。だが他のモンスター達も、その大半が既に怪獣の庇護下にあるか、大群を為しているか、単独でも生存可能な強力な個体であるかの何れかである。つまり、二人じゃキツい。

そんな訳でパーティーメンバー募集の張り紙を出して約6時間後、

夕刻でギルド内が帰還した冒険者達で賑わいだした頃合に面接が行われている。
　募集の張り紙を視て来た冒険者は三人。
　一人は、ファンタジーにおいては典型的とも言える魔法使いの格好をした紅い瞳の美少女。（実は頭のおかしな爆裂娘として周知されつつある）
　一人は、長い金髪をポニーテールにした全身鎧の女騎士。（生粋のドMかつ攻撃がほぼ当たらない所為で、パーティーを組んだ相手の大半から「頼むからもう勘弁してくれ」と懇願されている）
　一人は、比較的まともそうな銀髪の美少女で盗賊職。しかし、そこはかとなく苦労人のオーラが漂っている。（実は、女神エリスの化身であるため不定期参加）

「え～、実は最初に言っておかなきゃならないことがある。俺達、ゴジラ（二）とサキエル（人）は今は諸事情あって抜けてるんだけど、こう見えてガチで魔王を倒したいと考えている。」
　天界に帰りたいアクアはともかく、カズマ自身は正直諦めかけている部分もあるのだが。
（魔王軍とモンスターだけでもぶっちゃけムリゲーなのに、プラス怪獣軍団とかマジでクソゲーもいいところじゃねーか！）
「とにかく、俺達はそのために冒険者になったんだ。という訳で、俺達の冒険は過酷な物になる事だろう。特にダクネス、女騎士のお前なんて、魔王に捕まったりしたら、それはもうとんでもない目に遭わされる役どころだ。」
「ああ、全くその通りだ！昔から、魔王にエロい目に遭わされるのは女騎士の仕事と相場は決まってるからな！それだけでも行く価値がある！」
「えっ!?・・・・あれっ!?」
「えっ？・・・・なんだ？私は何か、おかしな事を言ったか？」
　それを聴いたクリスは、随分と遠い目をしていた。そこそこ長い付き合いだけあって、この性癖を矯正するのは不可能だと既に諦めてい

るのだが、せめて初対面の相手には隠すくらいはして欲しかった。
「そっちの二人もいいのか？、相手は魔王。この世で最強の存在に喧嘩を売ろうってんだよ、俺達は。覚悟は良いか？」
「我が名はめぐみん！紅魔族随一の魔法の使い手にして爆裂魔法を操りし者！我が必殺の魔法は山をも崩し、岩をも砕く！その我を差し置き最強を名乗る魔王！そんな存在は我が最強魔法で消し飛ばしてみせましょう！」
クリスもまた、魔王軍と敵対する事に怖じ気づく様子はなく、静かに闘志を燃やしている様に見える。
「あたしも、盗賊の強さってやつを見せてあげるよ。魔王討伐、いってみよう！」
すると、一番の関係者であるはずの女神様が
「ねえ、カズマ、カズマ・・・私、今の話聞いてたら何だか腰が引けてきたんですけど。何かこう、もっと楽して魔王討伐できる方法とかない？」
等と戯れ言を曰った。
取敢えず、明日の朝に正門の前に集合することにした。流石にエースとジョーカーが不在の状況で夜出歩くのは危険すぎる。全員が夜目が利くわけでは無いし、チームワークも碌にとれない即興のパーティーメンバーでは乱戦になった場合に同士討ちしかねない。何より、万が一にも強い怪獣に出くわしでもしたら逃げ出す余地も無く全滅する可能性だってあり得る。陽の下であればそのリスクを幾らかは軽減できる。

本来ならば駆け出し冒険者の街近辺に居てはいけない程の強大なモンスター。魔王軍が尖兵の一体であり、幹部に準じる程の力を持つ存在。
巫女の躯に、３対６本の腕、下半身は脚では無く大蛇のソレ。おそらくはラミアの突然変異体と目されていたが、先だって相対した日本

人転生者によって『姦姦蛇螺』と名付けられた化生。
そんな化物がアクセルの街を目指して進撃を開始した。
しかし、その姦姦蛇螺の目的は黒き灼熱（ゴジラ）と寄り添う青藍（サキエル）では無い。
そちらについては既に怪獣達が赴いている。
新たに予見された水の恒星（アクア）を観測する為である。

？　？　？　？　？　？　？　？　？　？

当たり前の話ではあるが、冒険者とは命の保証というモノが全く無い職業である。朝に討伐系のクエストを受けて、そのまま姿を見る事が出来なくなる。そのような出来事は日常的にありふれている。例えばクエストを達成した帰りに、消耗した状態で運悪く手強いモンスターに出くわしたり。或いはダンジョンの探索時に運良くモンスターとエンカウントせずに済んだと思いきや、不運にも悪辣なトラップに嵌りパーティーごと全滅したり。
そして、未練を残したまま死んだ所為で成仏できずにアンデッドに為り果てる事だってある。かつて討伐すべき存在であったモンスターに為って、かつて仲間や同業者であった者達に斃されるのだ。
彼等のように。
ゴジラとサキエルがこの世界に来て最初に受けたクエスト。その折に見え、斃したガバラが弄び嬲り殺した冒険者達の為れ果て。
怨嗟の呻きを上げ、生者に群がり、貪り喰らう。グールと呼ばれる中級のアンデッドモンスター。
無論の事、彼等とて好きでその様なモノになった訳では無い。この街に近付きつつある最上級のアンデッドにして魔王軍幹部のベルディアが発する瘴気に当てられた結果、そうなってしまったのである。
彼等は大天使の聖気に引き寄せられて、我先にと群がってくる。己こそを天に召させて貰いたいが故に。

その無様な有様を晒す亡者共にバーニングゴジラは一切の容赦なく熱線を放つ。
その熱線は今までのものとは異なり、着弾と共に大爆発を引き起こした。

バースト熱線。ただしこの業には幾つかの欠点がある。
一つ目は、普段以上のチャージを必要とする為、隙が大きい事。
二つ目は、消耗が激しい事。
そして三つ目が、小規模の核爆発を引き起こしている訳なのだから、周囲一帯が放射能で汚染されてしまうという事。普段は周囲の拡散された余剰放射能を即座に吸収しているから、結果として汚染も最小限に留められている。だがバースト熱線の場合、放射能が空高くまで舞い上がってしまうのだ。
この世界の多くの生物にとってもまた放射能は有害だ。モンスターであれば、持ち前の生命力故に多少は耐性がある。だが大多数の一般人はそうでは無い。多用すれば甚大な被害を及ぼすのは明白。
しかし、バーニングゴジラにとってはその程度の事、構うものでは無い。
人間は極僅かな例外を除いて、状況次第で善にも悪にもなる畜生どもだ。衣食が足りなきゃ礼儀も仁義も消えて失せる、所詮は少しばかり賢しいだけの獣に過ぎない。恨みは忘れない癖に、受けた恩は忘れる。自分の損害になるなら、全てを犠牲にしてでも免れようとする。面倒でなければ下らぬ善行を施す癖に、面倒であれば巨悪を見逃すことも厭わない。我欲に駆られて行動し、失敗すれば自分以外の何かが悪いと曰う。少なくともバーニングゴジラにとって人類とはそう言う種族である。
鎮静状態であれば怒りと恨みを押さえ込み、無視に務める事が出来ている。だが其れはあくまで棚上げしているだけであり、消えて無くなった訳では無いのだ。
普段大人しくしているのは、ジュニアを生き返らせてくれたサキエルとアクアからの依頼だからであり、間違っても人間に対する気遣い

などでは無い。結局のところ、ゴジラと人類が解り合い友誼を結ぶなど不可能なのだ。

理解していたつもりだったが、いつの間にか忘れかけていたその現実を改めて突きつけられたサキエルは暫くの間、頭を抱えた。

女神エリス／盗賊クリス

ゴジラとサキエルがギルドの扉をくぐると、なにやら騒がしい。
騒動の中心に居るのはアクアとカズマ、そして以前知り合った紅魔族の爆裂少女、見知らぬ金髪の聖騎士の少女、そして泣きべそをかいている盗賊職とおもしき少女。
「公の場でいきなりぱんつ脱がされたからって、いつまでもめそめそしててもしょうがないよね！よし、さっそくで悪いけど何でも良いから稼ぎのいいクエストを探そう！下着を人質に盗られてあり金失っちゃったしね！」
「おい、待てよ!?なんかすでに、女冒険者達の目が軒並み冷たいものになってるからほんとに待って!!」
実際はもっと酷く、冒険者以外の女性と、良識ある男性もドン引きしていた。佐藤　和真に「カスマ」「クズマ」「鬼畜」と言った異名や称号が定着した瞬間であった。
もっとも、ゴジラはそういった空気を意に介する事なく受付に行く。仮にも、日夜モンスターを相手にしている冒険者達が畏れを成して戦き道を譲る。その様はさながらモーセの海割りの如く。
しかし、受付の人間にはゴジラ語が理解できず、不機嫌そうに呻っているようにしか認識できない。その反応に、ますます不機嫌になっていくゴジラ。ついには泣き出してしまう受付の職員。遅々と進まぬ状況にキレかけるゴジラ。今やギルドの受付は阿鼻叫喚の地獄と化した。
見るに見かねたサキエルが事情を説明し、一先ず事なきを得る。まあその大天使様は大きなため息をつきながら胃の辺りを擦っていたが。

アクセル近辺の怪獣は粗方掃討された事で、今まで碌に街の外を出歩く事が出来ずに居た者達は大きく沸き立ち、新たに掲示板に張り出

されたクエストを吟味している。だが、この世界には魔王が召喚した怪獣達が各地で跳梁跋扈している。そして怪獣に太刀打できる人材は非常に限られている。能力的にも実力的にもそれが可能な存在の需要は高まる一方だ。故に、短期間の間に5体もの怪獣を立て続けに撃破したパーティーなど、周りが放っておく筈も無い。例えば、傲慢な権力者。

しかし、典型的な御貴族様などゴジラが最も忌み嫌うタイプの人間である。もしも居丈高に命令などされたなら、ガチギレ待った無しであろう。場合によってはカチコミかますまであるかも知れない。

いや、やらかしそうなのはゴジラだけでは無い。ドMの癖に潔癖で頭の固いクルセイダーと、なんだかシンパシーを覚える銀髪の盗賊は未だ大丈夫としても、頭のおかしな爆裂少女、安楽少女より厄介でアンデッドよりしぶといと言われるアクシズ教の女神、この世界の常識を知らず無礼な態度を取りそうな元ヒキニート。新たに常識人の胃痛枠が加わったとは言え、果たしてこの面々を御せるだろうか？うん、不安要素しか無い。

と言うか、新メンバーとの顔合わせが済んだので、ゴジラがもう帰ろうとしている。一応、まだギルド職員がクエストの内容を説明している最中なのだが。家格はそう高くないとは言え貴族から直々の依頼なのだが、ゴジラに貴族の権威など通じる訳も無い。

「まあ、成り上がり貴族からの依頼など無理をしてまで受ける事はあるまい。喫緊の内容でも無さそうだしな。」

「ん？なんだよ、随分と知った風な口ぶりだな？」

「・・・まあ、多少な。最近当主に成ったばかりの娘がな、実に我侭で見栄っ張りな性格なんだ。おおかた、噂の大天使と怪獣王を侍らせている様を周りに見せ付けたいのだろう。」

「商売繁盛で有名な貴族だけあって、報酬は良いんだけど、ダクネスの言う事ももっともだね。本当に困っている人達からの依頼を優先しようよ。例えば、これとか。」

報酬の良いクエストなら幾つかあるのだ。なにせ今は秋最中。木々は実り、動物たちは冬越しの為に必死に蓄える時期だ。その中に

は当然、畑や家畜を食い荒らす獣もいる。そして、そういったモンスターを捕食せんとする強力なモンスターも。白狼の群勢や一撃熊などだ。
「ん～、どっちも今一インパクトに欠けるわねぇ。せっかく美しくも麗しい女神と名高いこのアクア様と、私には及ばないとは言え大天使であるサキエル、最強の怪獣王ゴジラがいるのよ？どうせならもっと大物を狙いましょう！」
「おっと、紅魔族随一の魔法使いたるこの私を忘れて貰っては困りますよ。でも、いいですね！いかなる強敵であろうとも、我が爆裂魔法にて葬り去って見せましょう!!」

喧々囂々の末に結局、クマちゃん退治をする事になった。おまけに、その肝は高く売れる。
「なあ、本当に大丈夫なのか？俺とか、首を一撫でされただけで死んじまいそうなんだが。」
「大丈夫よ。これだけの面子が揃っているのよ？むしろ負ける要素が見当たらないわね。だいたいねぇ、カズマにはどんどんレベルを上げて貰って、魔王を倒してくれないと困るんですけど！じゃないと私、天界に帰れないじゃない!?」
ゴジラの頭上をちょむすけと取り合った末に負けて泣かされたアクアが偉そうに曰う。
「・・・・なんか、フラグを積み重ねたような気がして、もの凄く不安なんだが。まあ確かに、そのポジティブさは見習うべきかもな。よし、やるか！」
「そうそう、その意気だよ。さあ、いってみよう！」

いきなりだが、修羅場に出くわした。
修羅場と言っても、男女間による痴情の縺れ云々では無く、野生の生存競争的なやつである。
一行が依頼書に書かれていた目撃場所に到着したのは良いのだが、

そこには地球でのグリズリー級の巨熊が数頭が群れを成していた。そして一撃熊達と相対する、倍以上の大きさの蝦蟇を無理矢理直立させたような醜悪な姿をした謎のモンスターが一体。
「おいおい、なんだよアレ!?たった一匹なのに無双してるぞ!」
一撃熊の群が獲物を狩ろうとしている最中なのだと判断した一同は、少し離れた場所にある林に潜伏しながら様子見していたのだが、実際はその逆だった。毒の粘液を撒き散らし、怯んだ熊に掴み掛かって電流を浴びせ、更に毒を振りかける事で戦闘不能にして次にいく。
「しかし、この状況はむしろチャンスなのでは?あのカエルは一撃熊達を倒して油断したところを、私の爆裂魔法でまとめて薙ぎ払うのです!」
その提案は、確かに悪くない。先ずカズマが『バインド』で物理的に動きを封じ、クリスが『スキル・バインド』を重ね掛して反撃の余地すら与えず、めぐみんの『エクスプロージョン』で諸共一掃する。
「ねえカズマ、私は?私達は何をすれば良いの?」
「えっと・・・アクアは念のために皆に支援魔法を、ダクネスはめぐみんの護衛。ってかぶっちゃけ、ゴジラとサキエル様なら余裕で瞬殺できんじゃね?と思うんだが。」
確かに討伐のみを考えるならそれでも良いかもしれない。しかし、今回のクエストは新しいパーティーメンバーの能力や相性等の確認も兼ねている。カズマとてその事は理解している。なので、両名には待機して貰う。
しかし、忘れてはならない。このパーティーには特級のアンデッドホイホイが2柱も揃って居るのだ。何も起こらないはずが無かった。
「あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、!!な、なんだあれ──────?!!」
作戦自体は首尾良くいき、カエルとクマ2頭をまとめて葬り、残りの、毒で身動きできないクマ達にトドメを刺そうとしたところにソレは来た。
腐った死体、腐った魔獣、幽霊、骸骨、死霊の騎士、更にはドラゴ

ンゾンビまで。
　真昼の明るさのもとで見るアンデッドモンスターのグロさと腐乱臭にドン引きするカズマ。今日明日中はまともに飯が食えそうに無いくらい酷い。カズマに背負われているめぐみんも顔を顰めて鼻をつまんでいる。
　そんな中、無双ゲーの如く蹴散らしていく3人（柱）と1頭。アクアがワンパンで2桁を昇天させ、サキエルが光線で一帯を薙ぎ払い、ゴジラがドラゴンゾンビを焼尽くす。クリスは４０万エリスは下らないと豪語していたマジックダガーを逆手に握り、瞬く間に亡者達を斬り刻んでいく。ちなみにダクネスは全く役に立っていない。
　アンデッドが相手だからなのか、流石は女神アクアの戦果はずば抜けている。しかし、意外にもクリスも相当な奮闘振りだった。人間の盗賊で在りながらキルスコアは2位タイという快挙である。
「あの容赦の無さ、後輩のエリスを思い出すわね。あの子も、あれで結構過激なんだもの。特に、悪魔とアンデッドには私以上よ。」
　まあ実際の処、まるでも何も本人であるので当然と言えば当然なのだが。

ゴジラＶＳキングギドラ　～ご機嫌なキャベツ山盛り添え～

《緊急！緊急！街の中にいる冒険者各員は、至急戦闘態勢を整え街の正門に集まって下さい！繰り返します。街の中にいる冒険者各員は、至急戦闘態勢を整え街の正門に集まって下さい！特に、ゴジラ様とサキエル様は大至急お願いします!!》

この世界の食物はゴジラから見てもちょっとおかしかった。キャベツやレタスが空を飛び、バナナが川を泳ぎ、スイカが海を渡り、サンマが畑で収穫できる。そんな、意味不明（特にサンマ）な異世界だった。

いや、それよりも今問題なのは、キャベツの群れに交じって数体の怪獣もアクセルの街に襲来するという事だ。何せこの街で怪獣に有効打を与えられる者は僅かしか居ない。況してやこの街に居る冒険者達は殆どが駆け出し。状況は絶望的と言っていい。

カマキラス（ＦＷ１、昭和版３）を率い、野菜の大群を歯牙にも掛けず、ただひたすらに怪獣王を目掛けて進撃し続ける三頭双尾（キングギドラ）の黄金竜。ゴジラもまたキングギドラのみを見据え、その身体を滾らせる。赫灼（あか）く、紅焔（あか）く、緋炎（あか）く。

カマキラス達も侮れない。ＦＷの個体は航空戦艦『エクレール』を撃墜しているし、『迷彩』と『潜伏』の併用と音速の飛翔能力で奇襲に徹すれば、殆どの冒険者は為す術もあるまい。昭和版にしても、カズマ、アクア、クリスの３人がかりで漸く１～２体斃せるくらい。

残る１～２体は如何したって冒険者達が相手取るしか無い。野菜や、おこぼれにありつこうと追従してきたモンスターだって少なからず居る状況で。

多くの冒険者が恐れおののく中、一人の聖騎士の乙女(ダスティネス・フォード・ララティーナ)が進み出て高らかに謳い上げる。
「案ずるな、皆は私が護る!!」
こうしてアクセルの街、ひいてはこの世界の命運を賭けた戦争の火蓋は切って落とされた

??????????!!
バーニングゴジラは赤色熱線を、キングギドラはトリプルトルネードを同時に放ち、両者の中間地点でぶつかり合い大爆発を引き起こす。
「??????!!!」
7：3で赤色熱線の優勢といったところか。
「??????!!!」
「??????!!!」
キングギドラは真っ向勝負は不利と悟ったのか、飛翔し距離を取って引力光線を乱射し、何とか隙を作ろうとする。だがバーニングゴジラは、デストロイアの猛攻をものともせず圧倒するほどの超高出力を可能とする。通常の引力光線程度じゃ牽制にもならない。
バーニングゴジラは幾度か赤色熱線を撃つが、キングギドラの高速旋回によって掠める程度に留まる。掠った程度では、多少体勢を崩しはするがダメージにはなっていないようだ。
成程、確かにキングギドラとてあの時よりも強くなっている。察するに、バーニングゴジラ相手にも通用しうる切り札はあるのだ。だが、恐らくは制限付き故に安易に行使する事は出来ない代物。慎重に機を伺っている。
「!!」
バーニングゴジラもキングギドラの旋回機動に慣れつつあって、漸く熱線を直撃させる事に成功する。キングギドラは咄嗟にバリヤーを全力展開したものの、弾き飛ばされて地面に撃墜した。
「!!」
流石に少なからぬダメージを負ったようで、もがき苦しみながらも起き上がって反撃しようとする。だがバーニングゴジラは容赦なく

追撃の熱線をくらわせる。キングギドラもトリプルトルネードを同時に放ち、両者が共に相手の全力攻撃の直撃を受ける事となった。
「??????????!??????????????????!!」
バーニングゴジラは吹き飛ばれはしたものの、即座に回復し咆哮を上げる。対するキングギドラは見るからに重傷で、グッタリと倒れ伏した状態。
バーニングゴジラはトドメを刺すために、キングギドラに近付いていく。だが瀕死のキングギドラは、このままでは本当に死んでしまうと、遂に切り札を発動した。
キングギドラのオーラが爆発的に増大し、金色の粒子を纏い復活したのだ。
「「???!!???」」
出血は止まり、引力光線の威力も上昇している。だがそれは、決死の特攻なのは明らかだ。あれだけ傷付いた身体でそれだけの出力を無理矢理ひねり出しているのだ。そう間もない内に過負荷に耐えきれず自滅する。
だが、バーニングゴジラに相手の自滅を待つ等という選択は有り得ない。ただひたすらに真っ向から叩き潰すのみ。
「??????????????!」
炉心温度を更に上昇させ、赤色熱線を放つ。しかし、その一撃をキングギドラは受け止め、剰え引力光線の威力を上乗せして跳ね返してきたのだ。
「??????????!!」
カウンターの直撃を受け、バーニングゴジラは凄まじい程の爆炎に呑み込まれる。
「「???????!!????????!!」」
先程とは逆に、倒れたバーニングゴジラが起き上がる前に追撃を仕掛けるキングギドラ。だがそれが焦りと為り、仇となった。
重力操作で自重を倍加し、フライングドロップキックで押し潰そうとするキングギドラだったが、バーニングゴジラは直前で起き上がり回避。キングギドラが着地する瞬間に尻尾で足元を薙ぎ払った。

「「??!!??!!」」
キングギドラがバランスを崩して前のめりに転倒したところに、双尾を掴み抱えるバーニングゴジラ。空中に大きく振り上げ、地面に思いっきり叩きつける。かつての戦いをなぞるが如く、何度も叩き付ける。
そして、ついにキングギドラに限界が訪れた。金色のオーラが霧散し、無理を積み重ねた身体は崩壊し始めた。
バーニングゴジラは全力の一撃を以てトドメを刺す。これはキングギドラを強敵と認めとが故に、無様に自滅する様を見るに堪えなかったのだ。バーニングゴジラなりの敬意を以て、バーニングスパイラル熱線を放った。

魔王城のとある一室にて、その戦争を視ていた男が居た。キングギドラがバーニングゴジラに滅ぼされた事で、呻きながら激しく地団駄する。
その男こそは、魔王軍の9人目の幹部にして、怪獣部隊の統括司令官。
「ふん！ゴジラめ、やはり一筋縄ではいかぬか。・・・まあいい、首無し騎士と蛇女程度でも当て馬くらいにはなるだろう。」
男は紅魔族の里を視遣る。侵攻しているスペースゴジラがモゲラ（擬）を大破爆散させ、今や残機は過半数を割っている。
だが肝心の紅魔族には、死傷者が殆ど出ていない。魔法でモゲラ（擬）をアシストし、スペースゴジラの嫌がらせをしては、いざ自分が狙われたらテレポーテーションで逃げ回るという凄まじい程の鬱陶しさを存分に発揮している。
しかし彼等は気付いていなかった。里の正門広場に鎮座しているモンスターの石像らしきものの正体を。

ＶＳカマキラス

バーニングゴジラとキングギドラの咆吼と覇気だけで野菜の大群は失墜していく。寄って集って来たモンスターも恐れを為して逃げ散っていく。そして多くの冒険者もまた居竦んでしまった。

「いやまあ、そりゃビビるわな。ラスボスクラスと裏ボスクラスのガチバトルなんて、巻き込まれたら命がいくつあっても足りねぇし。」

カマキラスはカマキラスで充分に脅威的だ。怪獣基準では弱い方でも、そもそもアクセル有数の火力であるめぐみんの爆裂魔法が通用しない上に、カズマの攻撃では一応は通用するものの大したダメージにはならない。アクアが女神の権能を以て『セイクリッド・クリエイト・ウォーター』を使えば、斃せるかも知れないが街に多大な損害をもたらす事になってしまうので却下。

バーニングゴジラはキングギドラ、サキエルはカマキラス（ＦＷ）の相手で暫くは手一杯。

「畜生!!こうなったらやるしかねぇ・・・!!」

一人の聖騎士（ダスティネス・フォード・ラテティーナ）の乙女が進み出て高らかに謳い上げる。

「案ずるな、皆は私が護る!!」

『ウオオオオオオオオオオオオオオ――――――!!!』

冒険者達は鬨の声を上げ己を鼓舞し、いざ征かんと駆け出す。

？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？

この戦争を間近で観戦していた魔物が２体居た。

「・・・ほう、駆け出しの雑魚ばかりと思いきや、中々強そうなのか混じっているでは無いか。」

「ベルディア様、声が震えております。」

「こっこ、これは武者震いだ!!断じてビビッてなどおらん!!大体、お前だって声が擦れているじゃないか！」

「私の声はこの状態がデフォルトで御座います。」
何だかんだと言ってはいるが、正直に言えば両者は困り果てていた。『黒き灼熱』がゴジラ、『寄り添う青藍』が大天使の事を示しているのは間違いない。更には、今日の処は確認できなかったが『水の恒星』に該当する者が居るのもほぼ確実だ。
サキエルだけならまあまだ良かった。確かな強敵なれど、決して斃せない相手ではない。問題なのは、バーニングゴジラである。キングギドラでさえ、単独では戦略級（ディザスタークラス）だったが、だが奴はそれすら凌駕する。単独でも世界を滅ぼしかねない終焉級（ワールドエンドクラス）の大怪獣など、如何しろと言うのか。少なくとも、並の怪獣（ビーストクラス）程度では鎧袖一触されるのがオチだ。経験値を譲渡するに等しいだろう。
「此方の終焉級（スペースゴジラ）は紅魔族の里を壊滅中。かといって、モンスターではどれだけ強くても同じステージに立つ事さえできん。・・・・ど、どうしよう・・？」
「・・・・取敢えず、この近辺に少々寂れた廃城がありました。そこを橋頭堡とし、暫し偵察と立案に務めるのが宜しいかと具申致します。」
「う、うむ。そうだな、そうしよう。」

？　？　？　？　？　？　？　？　？　？

あれから数日が経過した。
ただの一人も死者は無く、怪獣達を斃しきったのは快挙と言えよう。被害らしいモノを強いて上げるなら2大怪獣のガチバトルで生じた余波で周囲の地形がちょっと変ったのと、例年に比べて野菜の収穫量が激減したくらいなものである。
「何ですって～!?ちょっとアンタどういうことよ!?」

この女神、ちゃっかり野菜の収穫も行っていたらしい。しかしどうにも買い取り金額に納得がいかずギルドの受付嬢と揉めている。

実はカマキラス達は諜報や斥候要員で表立った活動をしていなかった為、賞金が賭けられていなかった。キングギドラにしても、魔王城からアクセルの街にやって来る間に、大領主の邸宅に襲撃をかましている。ついでと言わんばかりの雑さで。その所為で死に損ない（アルダーブ）によって高額賞金が賭けられるのが内定してはいたが、実際に賭けられる前に討伐されたので特別報酬は無しである。

カマキラス達を斃して得たマナタイトは参加した冒険者全員で山分け、キングギドラは別格の強敵だけあって、伝説級の宝珠コロナタイトとなったが、それはゴジラのモノとなった。野球ボールくらいのサイズだが売れば億単位は下らないであろう代物。しかし、単独撃破したゴジラ自身がそれを今回の報酬として望んだ以上は是非も無し。

そんな事情もあって、苦労した割には報酬は今一だった。とは言え、贅沢をしなければ1～2ヶ月は保つ金額なのだが。

思っていた以上に人類は詰んでいた

あの戦争を生きてくぐり抜けて事で、パーティーメンバーの幾人かのレベルが上がった。そこでカズマがたまったスキルポイントで何か切り札になり得る攻撃系のスキルを習得したがった。

『冒険者』は職業補正こそ皆無だが、全スキルを習得可能という所が唯一の利点なのだから、多彩なスキルを覚えておきたい。と考えるのは当然と言えば当然か。既にクリスから盗賊系のスキル全般、知り合いの冒険者達から『片手剣』『弓』『狙撃』『千里眼』を教わりはしたが、攻撃力に乏しいのは否めない。

しかし中々難しい。例えば、めぐみんから爆裂魔法を教えて貰い、習得可能な状態になったとして、先ずポイントが絶対的に足りない上に、仮に習得したとしてもカズマの魔力では一撃でさえ真面に撃てまい。

「う～～ん、今のポイント残高でもギリギリいけそうなスキルは・・・・『怪獣王の咆吼』か『白熱光』か。」

ゴジラのスキルは他の幾つかを既に視ているのだが、ポイント的には何とか習得可能でもカズマの能力値では使い熟せそうに無い。

『怪獣王の咆吼』を冒険者が習得し使用した場合、自分よりも弱い相手には効果があるが、逆に強い相手に迂闊に使用すれば挑発行為と見なされ襲いかかってくる。実力が伴っていなければ文字通りに虚仮威しだ。

『白熱光』は鋼鉄さえも容易く融解させる程の吐息である。既に習得している『魔力収束』と併用すれば擬似的な放射熱線とすることも出来る。ただし、消耗が激しく身体への負担も大きい。

カズマが悩んでいると、酔った同業者が話しかけてきた。

「よう、カズマ。知ってるか？なんでも魔王軍の精鋭二人が、この街からちょっと登った丘にある、古い城を乗っ取ったらしいぜ？おかげでモンスター共がビビって引っ込んじまって、碌なクエストがねぇ。」

「そりゃまた、はた迷惑な話だよなぁ。でも、そういうことなら腕利きの騎士やら冒険者やらが討伐に来るんじゃねぇの？」

「いや～～～、それがな・・・・・」

しかし、この世界は甘くない。ただでさえ魔王軍やモンスターの対処で一杯一杯だったのだ。そこに怪獣軍団が登場した事で、完全にキャパシティがオーバーしてしまった。おまけに、実はチート持ち転生者の供給が途絶えている有様。

現在、王都はメガニューラの大軍やメガロ、ムートーの番などの怪獣が襲撃を繰り返している。更に言えば、M宇宙ハンター星雲人が橋頭堡としてゴジラタワーを建設中だ。そして、本来であれば強大な戦力たり得た紅魔族の里はスペースゴジラによって壊滅秒読み状態。

圧倒的に人手不足、新兵を補充した端からガンガン死んでいく。如何に相手が魔王軍幹部であろうと、討伐に人員を割ける余裕など無い。寧ろ、そんな人材がいるのならこっちに寄越せと言い出しそうなくらいには余裕が無い。

（――――――どうやら、俺が思っていた以上に人類は詰んでいたらしい。ベリーハード通り越してルナティック、こっちにゴジラとサキエル様がいなけりゃナイトメアでさえヌルいレベルじゃねぇか!!?）

そんな状況下でも相変わらずマイペースなのが二人。めぐみんとアクアである。アクアはと言うと、仮にも女神とは思えないくらい俗物的で快楽主義。毎晩、酒を浴びるように呑んでは宴会芸を披露する。その所為で基本的に金欠であり、しょっちゅうカズマやサキエルにお小遣いをねだっている。昨日、アクアの小遣い稼ぎと、レベルアップによる【幸運】【知力】の向上を目的としたクエストを受けたりもした。その際、予期せぬ大物アンデッドに出くわしたりもしたが、詳しくは割愛する。

めぐみんはサキエルに付き合って貰い一日一爆裂（日課）をこなす日々。その所為でまた厄介ごとに巻き込まれる事になった訳だが。

《緊急！緊急！街の中にいる冒険者各員は、至急戦闘態勢を整え街の

正門に集まって下さい！繰り返します。街の中にいる冒険者各員は、至急戦闘態勢を整え街の正門に集まって下さい！特に、ゴジラ様とサキエル様は大至急お願いします!!》

再び街中に響き渡る緊急アナウンス。数日前に行われたばかりの怪獣大戦争の時と同じ様に空気が張り詰める。そして、正門前の広原にて2体のモンスターが姿を現した。魔王軍幹部のデュラハンのベルディアと、準幹部でラミアの変異体と思われる姦姦蛇螺である。

既に装備を調え集っていた冒険者達は、畏れはしても卒倒する者は居なかった。先達っての経験に加え、希望が在るが故にであろう。

しかしあの二人、目は血走りこめかみには青筋がたっている。何というか、ブチキレ寸前といった感じが漂っている。

「俺達はつい先日、この近くの城に越してきた魔王軍の幹部の者だが・・・・・・・・ままま、毎日毎日毎日毎日っっ!!あの城に、毎日欠かさず爆裂魔法を撃ち込んでく頭のおかしい大馬鹿は、誰だあああああああー!!」

この街の冒険者の中には爆裂魔法を代名詞とするアークウィザードが一人居る。それを知っている皆は当然のようにめぐみんに視線を向けた。

「――――――貴女ですか、あの城に連日爆裂魔法を撃ち込んでくる魔法使いは？」

こちらは激昂はしていないものの、やはりキレているのがヒシヒシと伝わってくる。ネットリと絡みつくような、怨念じみたオーラを纏っているのだ。

流石のめぐみんも些か怯むが、颯爽とマントを翻し、高らかに名乗り上げる。

「我が名はめぐみん！紅魔族の者にして、この街随一の大魔法使い！爆裂魔法を操りし者!!」

そして、ぶっ倒れ(大)ためぐみん(天使)を抱っこしていた(サキエル)者が名乗り上げる。

「私は水と繁栄を司る天使サキエルと申します。彼女の連日の爆撃は、貴方達を城から引きずり出す為の作戦の一環だったのですよ。」

「・・・そっ、その通りです！こうしてまんまとこの街に、二人だけで

やって来たのが運の尽きです！」
「・・・・・・おい、あいつ絶対作戦とかわかってなかっただろ。」
「・・・うむ、しかもさらっとこの街随一の大魔法使いとか言い張っているな。」
「しーっ！そこは黙っておいてあげなさいよ！良いとこなんだから、このまま見守るのよ！」
しかし、魔王軍の精鋭たる二人はサキエルのみ注視している。駆け出しのひよっこなど眼中にも無いのだろう。それに、何より警戒していたゴジラの姿が此処に無いの為、余計に不安になっているようだ。
「ああ、一応言っておきましょう。私達は貴方達を決して逃がしません。徹底的に殲滅します。」
大天使として審判の宣告を下したサキエルは、遠見の術で件の廃城を映し出す。その映像は、魔王軍の精鋭たる二人にとって絶望的なものであった。
なんとバーニングゴジラが単独での城攻めを敢行していたのだ。それはもはや一方的な蹂躙と言っても過言では無かった。連日の爆撃に加え、最大戦力の二人が出払っているのだ。アンデッドナイト達は真面な抵抗さえ出来ず、蹴散らされている。
「あ、嗚呼・・・・・ウアゞアゞアゞアアァァ!!己己己己己己己己己己己己己己己己己己己!!絶対に許さいイイ――――――!!!」
激昂しサキエルに襲いかかる姦姦蛇螺。迎え撃つサキエル。暗黒と聖光が乱れ飛ぶ。毒液と聖水がぶつかり合い飛沫を上げる。呪詛と洗礼詠唱が響き渡る。
ベルディアもまた、黙ってみている訳も無い。魔王軍幹部の肩書きは伊達では無く、本気を出せば単独でアクセルの街を壊滅させられる実力があるのだ。（尚、実際にそれをやるとウィズを敵に回す事になる。）
だがこの街にはゴジラとサキエル以外にも注意すべき連中が居た。例えば、耐久特化のクルセイダー。例えば、小賢しさと悪運だけはやけに良い最弱職。例えば、紅魔族の爆裂狂。例えば、水の女神。
詰まるところ、彼等の命運は疾に尽き果てていたのだ。

魔剣の勇者

王都は今、危機的状況にある。怪獣達に絶え間なく襲撃されているのだ。怪獣を斃し得る力を持つ勇者は確かに居る。だが敵軍は多勢に無勢。どれだけ頑張ろうとも刻一刻と追い詰められているのは認めざるを得ない。

その中でも怪獣相手に戦果を上げて見せた益荒男達に対する受勲式はちゃんと行われる。と言うか、やらないと根無し草を標榜とする冒険者などは、国を見限って余所に行ってしまいかねないのだ。

その様な状況下で舞い込んできた情報は宮廷中を激震させるには充分すぎるものだった。

曰く、そのパーティーは終焉級（ワールドエンドクラス）の大怪獣と正真正銘の大天使、他にも凄腕の上級職冒険者が多数在籍している。

曰く、この1ケ月の間に幾多もの怪獣を屠り去っている。しかも、そのうちの1体は戦略級（ディザスタークラス）である。

曰く、つい昨日には魔王軍幹部のベルディアと、精鋭の姦姦蛇螺を撃破した。

「俄には信じがたい話です。でも、もし本当ならば到底捨て置けません。」

「はっ！ミツルギ殿に至急調査を依頼しましょう。彼ならば信頼も実績も申し分ない。それに、パーティーメンバーの増強の為にアクセルの街に行きたいと言っておりましたし、ちょうど良いでしょう。」

「事実確認がとれ次第、そのパーティーには招集の勅命を出す事に致します。」

「レイン、明日の朝にでもテレポートでアクセルに送り届け、サポートするように。まあ、ミツルギ殿であれば手早く済ませる事だろうが、件の怪獣は相当に強いらしいからな。念は入れておいた方が良いだろう。」

「はい！お任せ下さい！」

だがレインは後にこう語る事になる。「あれは、相手が悪すぎた。」と

？　？　？　？　？　？　？　？　？　？

カズマとアクアは、とある場所へ赴いていた。スキル構成にアレコレと悩んでいた際に、ふと思い出したのだ。以前に、大物アンデッドと邂逅を果たしていた事を。

このパーティーは、やっぱりどう考えてもアンバランスだ。主戦力のゴジラとサキエル、盗賊のクリスは不定期参加で、場合によっては居ない事もある。

あの3人が不在の状況で、もし強い怪獣と遭遇しようものなら詰みだ。故に、早急に安定した火力を手に入れる必要があった。いや、今でも全く無い訳では無いのだが、アレは魔力消費が激しすぎる。

その為にこの『ウィズ魔道具店』に訪れたのだ。カズマは店に入る前に何度もアクアに釘を刺す。

「ちょっと、何で私がそんなことしなきゃなんないのよ。一度言っておきたいんだけど、カズマって私をなんだと思ってるの？私、チンピラや無法者じゃないなよ？女神よ？神様なのよ？サキエルの上司にして、エリスの先輩なんだからね？」

一人なのに姦しいアクアの文句を右から左に聞き流しながら入店する。

「いらっしゃい・・・って、ああっ!?」

「あああっ!?出たわねこのクソアンデット！あんた、こんなところで店なんて出してたの!?リッチーのくせに生意気よ！こんな店、神の名の下に燃やしてっいだいっ!?」

予想通りに暴れだしたアクアに制裁を下しながら挨拶するカズマ。
「ようウィズ、久しぶり、って程でも無いかな？まあとにかく、約束通り来たぞ。」

店内を見て回りながら小姑みたいな嫌がらせを繰り返すアクア。それにひたすら脅え、赤べこの様に首を振り謝罪するウィズ。分ってはいたが、この二人の相性は最悪らしい。もしここにサキエルが加わっていたらカズマでは制止不可能だったかも知れない。
「なあ、ウィズ。以前言ってたろ？何かリッチーのスキル教えてくれるって。何か教えてくれないか？」
カズマの提案に、予想以上の剣幕でくってかかるアクア。
「ちょっと、何考えてんのよカズマっ！リッチーのスキル？リッチーのスキルですって!?以前この女に名刺貰ってた時、一体何を話してるんだろうって思ったら！リッチーの持つスキルなんてろくでもない物ばっかりよ！そんな物覚えるなんてとんでもないわ！いい？リッチーってのはね、薄暗くてジメジメしたところが大好きな、いってみればなめくじの親戚みたいな連中なの！」
「ひ、酷いっ！」
カズマは自分の考えを懇切丁寧に説明し、リッチーのスキルが打開策につながるかも知れないと説得する。アクアは渋々ながらも一応は納得の意を示す。
結局、カズマはウィズから『ドレインタッチ』を教わった。このスキルがあれば、『白熱光（擬似放射熱線）＋魔力収束』や、カマキラスにトドメを刺した『クリエイト・ウォーター＋クリエイト・アース＋魔力収束《アブレシブ・カッター》』だってぐっと使いやすくなるだろう。
その後は、ウィズが実は魔王軍幹部と判明し、再度アクアが襲いかかったり、ゴジラとサキエルがこの場に居た場合の状況を考えたカズマが戦慄し居ない事に心底安堵していたりもしていた。
暴れるアクアに『バインド』をかけて雑に担ぎ上げ、帰路につくカズマ。
しかしこれ、端から見たらかなりアレな光景である。ロープで雁字

搦めになって、男に雑に担がれながら喚き立てる美少女。本来なら通報待った無しなのだが、アクアが悪名高いアクシズ教のアークプリーストだと知っている街の住人は遠巻きに見ているだけで、寧ろ関わり合いになりたくないと避ける者も少なくない。合流した他のパーティーメンバーも、どうせアクアがまた何かやらかしてカズマに折檻されているんだろう、と勝手に納得している有様だ。

「め、女神様っ!?女神様じゃないですかっ!」

突如、大変な血相で駆け寄ってくる男。そしてカズマに激昂しながら掴み掛かり、アクアの解放を要求した。カズマは仕方なくアクアを解放しようとするが、その前に男が腰元の剣を抜き放ち一閃。綺麗にロープだけを切断して見せた。唖然としている一行を尻目に、その男は、同じく唖然としているアクアの手を掴み何やら捲し立てている。

「おい、あれお前の知り合いなんだろ?女神様とか言ってたし。多分、先に送られてきた日本人転生者じゃねぇの?お前が何とかしろよ。」

しかし当のアクアは、その男に対して首を傾げる。

「・・・えっと・・・・・あんた誰?」

「何言ってるんですか女神様!僕です、御剣　響夜ですよ!あなたに魔剣グラムを頂いた!!」

予想通り、チート持ちの日本人転生者だったらしい。その男の後ろには、取り巻きと思われる美少女が3人。そのうちの一人、地味な魔法使いの美少女はダクネスと知り合いだったようで挨拶を交わしている。

(チッ!ハーレム野郎が!)

毒づくカズマを余所に話は進む。と言うか男が一方的に説明を要求してくる。

「バカな。ありえないそんな事!君は一体何を考えているんですか!?女神様をこの世界に引き込んで!?しかもその理由が、ただの腹いせで転生特典に選んだ!?ありえない!!」

人の話も聞かず、ヒートアップし続ける御剣某。

「女神にしてアークプリーストのアクア様、そっちの二人もクルセイダーにアークウィザードか。君は随分とパーティーメンバーに恵ま

れているんだね。だと言うのに就いてる職業は最弱職の冒険者か。君達、今まで苦労したんだね。これからは僕と一緒に来るといい。というか、パーティーの構成的にもバランスが取れてていいじゃないか。ソードマスターの僕に、僕の仲間の戦士と、そしてクルセイダーのあなた。僕の仲間の盗賊と、アークウィザードのその子にアクア様。まるであつらえたようにぴったりなパーティー構成じゃないか！」

この発言にはカズマ達や、当のアクアでさえドン引きした。大顰蹙で非難囂々。だけどそれでも折れる事無く、明後日の方向に頑張り続ける御剣某。

「悪いが、僕に魔剣という力を与えてくれたアクア様を、君の様な男には任せられない。君にはこの世界は救えない。魔王を倒すのはこの僕だ。アクア様は、僕と一緒に来た方が絶対にいい。――この僕と勝負しないかい？アクア様を、持ってこられる『モノ』として指定したんだろ？僕が勝ったらアクア様を譲ってくれ。君が勝ったら、なんでも一つ、言う事を聞こうじゃないか。」

などと、極めて自分勝手な戯れ言をほざきだした。だが高レベルかつ上級職のソードマスターで魔剣まで持っている御剣某と、最弱職の冒険者でレベルもまだ１０台のカズマでは、真面に戦り合えば結果は明白。

御剣自身も、流石に無茶振りが過ぎる自覚があったらしく、ハンデを付けても良いという。

「アクア様を除いたパーティーメンバーの一番強いものに代理を頼んでも良い。相手が誰であろうと、僕は受けて立つ。決して負けない！」

カズマが所属するパーティーの最強は、言うまでも無くゴジラである。

いやはや、全く無知とは恐ろしい。

魔剣の勇者様のご冥福をお祈りします

ゴジラの原動となるものは一体なにか？それは『憤怒』である。身を焦がす程の怒りを以て、眼前に立ち塞がる者の全てを焼尽くすのだ。何処かの世界には、怨念と憎悪を以て、生者を蹂躙することに愉悦するゴジラも居るのかも知れないがそれは置いておく。

ゴジラは決して忘れない。例え歴史を改編されようとも、人間達が行った水爆実験の所為で全てを失い、見るも無惨に変貌してしまった事を。その苦痛は筆舌に尽しがたく、唯一無二という孤独は何より恐ろしかった。故にゴジラは赦さない。自分を傷付けようとする存在、自分の仲間を奪おうとする者を。

？　？　？　？　？　？　？　？　？

御剣の発言を聞き、カズマ一行は唖然とした。

「ええっと、御剣だっけ？悪い事は言わねえから、アイツとだけはやめた方が良いぜ？」

「そうね、カズマさんの言うとおりだわ。やめておきなさいな。」

「知らないというのは、こうも恐ろしい事なのですね。アレに挑むなんて、自殺も同然だと言うのに。」

「うむ、皆の言うとおりだ。私が代わりに相手をしてやるから、それで我慢しておけ。なんならその自慢の魔剣を遠慮無く振って良いんだぞ？私は一向に構わん！いや、寧ろやれ!!」

これには流石の御剣も困惑するが、前言を撤回する気は無いらしい。余程自信があるのだろう。

転生の際に女神アクアから貰った魔剣グラム、高レベルの上級職、最前線で積み重ねた経験、それらに見合った業物の鎧。

成程、確かに諸々の尊大さにも頷けるだけの戦闘能力を誇ってい

る。
　しかし、ゴジラの前では無意味どころか逆効果でさえある。
「コイツ本っ当に人の話聞かねぇな。・・・おい、どうするよ？」
「ん～～～、とりあえず実際に遭わせてみたら？」
「遭えばきっと腰抜かしますよ。」
「そうだな、仕方ないか・・」
　一行はギルドに向かう事にした。サキエルなら恐らく巧い事ゴジラを宥めてくれるだろう。なんならサキエルに決闘の代理役を頼みたいくらいだ。彼女であればそつの無い美事な対応をこなすに違いないのだから。
　ギルドの酒場にはサキエルは居らず、ゴジラとクリスが居た。なんとも間が悪い事に、サキエルは野暮用で少し席を外したらしい。ちなみにクリスはゴジラ語をちゃんと理解できるらしく、ゴジラも意外にもクリスの事を邪険にしている様子は無かった。
　真逆の怪獣王に御剣は文字通りに吃驚仰天、取り巻きの美少女３人は声にもならず卒倒しかけている。
　凡そカズマと同じリアクションの御剣にざっくり説明するアクア。めぐみんとダクネスから決闘云々の話を聞き不快の意を表明するゴジラ。この世界の大戦力の一人が死にそうで頭を抱えるクリス。
「・・・・・え～～～っと、君さあ・・・本当にゴジラと戦う気？」
　クリスの掛ける声に御剣が応えるよりも先に反応したのは取り巻きの女達の方だった。
「ひっ、卑怯者っ！卑怯者、卑怯者、卑怯者!!あんた最低っっ!!男だったら正々堂々、自分で勝負できないの!?」
「そっ、そうよそうよ!!いくら何でもこんなの反則よ!!」
　喧しく喚き立てる。まあ仮に本来通りカズマが相手をしたとしても、結局は敗北していただろう。冒険者同士の決闘とは則ち何でもありな喧嘩であり、騎士の御前試合やルールに則ったスポーツ等とは訳が違うのだから。
「・・・心配してくれて有り難う。でも、大丈夫。なにせ、僕は女神様に選ばれし勇者だからね。」

端から見れば精一杯の虚勢なのは一目瞭然。だが女共には一体どう映っていたのか

「「キョウヤ・・・素敵！絶対に勝ってね!!」」

「勿論！例え相手が天下の怪獣王だろうと、引く気は一切無い！僕が勝った暁には、約束通り彼女達は皆ウチのパーティーに来る！いいな!!」

自分に心酔している女達の前でああも威勢良く啖呵を切ったからか、今更引くに引けなくなっている。そしていつの間にかアクアのみならず他の女性陣も移籍対象になっている。

ゴジラとサキエルについては、決闘の如何に関わらず後ほど王都招集の勅命が下されるそうだ。

ゴジラとしては怪獣達との戦い自体には否意は無い。元よりその為にこの世界に来たのだから。ただ人間の守護獣に成り下がるなど、断固として拒否する構えである。

何より、この人間はカンに障る。アクアに対して恩義があるのは理解したが、その後のコイツの言い分は聞くに堪えない稚拙なもの。身勝手な正義を振りかざして、自己満足の悦に浸り、他者を蹂躙しておきながら自分が正しいと信じて疑わない。成程、勇者と呼ぶに相応しい。

断じてカズマのように『リア充共マジでウゼェ！大・爆・死・確・定だオラァ!!』などと思っている訳では無い。

魔剣の勇者と名高い御剣　響夜ＶＳ怪獣王ゴジラ

決闘はアクセルの街から少し離れた高原にて行われる事になった。ギルドの裏にある広場程度じゃ間違いなく周囲に被害が出る為だ。野暮用を済ませたらしいサキエルも合流した。決闘はアクアが主審を、クリスとサキエルが副審を務める。勝負ありと見なされても尚オーバーアタックを仕掛けようとした場合は、この３名が総掛かりで

制止する。
　両者はこの条件に同意し、所定の位置にスタンバイする。
「準備は良いわね？用意――――――――」
　ゴジラはバーニング化はせず通常モードで、嚇灼の殺意を湛える。その様はまるで噴火直前の火山の如く。
　対する御剣は魔剣グラムの性能と自身の魔力を全力で発揮し、相乗させる。そうして練り上げたエネルギーをグラムに纏わせ、研ぎ澄ます。
――――――――開始!!」
「――――これが、僕の全力だ！行くぞ!!『ギガブレイク』!!」
　御剣は、この一撃に全てを賭けることにした。端から長期戦の事など一切考えず、正しく初撃で決殺するに足りる業。
　その斬撃は確かにゴジラへと届いた。皮を裂き、肉を斬り、しかし骨を断つには到らず。
　ゴジラは『ギガブレイク』を真っ向から受け止め、あろう事かそのエネルギーを背鰭で吸収していく。そして、放射熱線にその威力を上乗せして発射。
「なあ!?ぐ、がああァァァァ――――」
「勝負あり!!それまで！」
　驚く事に、御剣は瀕死の重傷ではあれど絶命していなかった。素のステータスの高さと、魔剣グラムの恩恵と、跡形も無く砕け散った業物の鎧のおかげだろう。もっとも、全身の至る所が熱傷深度ＩＩ以上で心肺停止状態。おまけに放射能被曝している。
　アクアが習得している最高の回復魔法『セイクリッド・ハイネスヒール』を以てしても完治とはいかない。少なくとも数ヶ月は治療に専念せねばなるまい。
　まあ本気のゴジラと戦ったのだ。死ななかっただけマシと思うしか無い。

？　？　？　？　？　？　？　？　？　？

一方その頃、紅魔族の里は遂に限界を迎えていた。異なる宙より来たりし破壊神スペースゴジラの力は紅魔族を以てしても余りにも圧倒的だった。

モゲラ（擬）はとうとう全滅し、爆殺魔人もぐにんにんは『フォトンハリケーン』による電磁パルスによって呆気なく機能停止。司令塔のジェットジャガーも何だか良くわからない理屈で巨大化して戦ったが、既に中破状態。

昔から里にある用途不明の謎施設は軽微な損壊だが、中に収められている『魔術師殺し』や『世界を滅ぼす兵器』については、極めて残念な事に使い方が分らない。それでも凡そ安全と思われる場所に非戦闘員達と一緒に送り届けた。しかし、レールガン（仮）については、同行していた幹部シルビアに接収されてしまった。

「嗚呼・・・里が、燃えていく・・・・」

「――――もはやこれまでか。・・・里は捨てるしかあるまい。魔王軍の思い通りになるのは癪だが、生きてさえ居ればまたやり直せる。」

「そんな、族長・・」

しかし、売られた喧嘩は必ず買う、やられたらやり返す。紅魔族に伝わる掟である。この場に残って今まで戦っていた者達、既に退避している非戦闘員達、彼等全員がその屈辱と憤激を心に刻み込んだ。彼の邪知暴虐の怪獣を討滅ぼすと決意した。紅魔族は対魔王軍用改造人間である。しかし基本的には、政治や権力に与する事無く自由気ままに人生を謳歌している。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。

彼等は誓う。アイツ絶対ぶっ殺す!!!と

おや？安楽少女の様子が

ゴジラとサキエルがこの世界に来て２ヶ月が経過した。秋も過ぎ去り、冬の訪れも間もなく。

ゴジラの寝床である湖の畔には、あるモンスターが根を張っている。もっとも、そのモンスターの方が最初から住み着いていたところに、ゴジラか後からやって来て湖に住み着きだしたのだが。

畔の近くにある森の中にソレは居る。目の良い者なら畔からでもギリギリで見えるかどうかの位置。３ｍはあろうかという彼岸花に寄り添うように佇む美しい少女。まるでアルビノ体質の様にも見えるが儚さは微塵も感じさせず、漆黒のフード付きロングコートをはためかせる様は背後の巨大な彼岸花も相まって死神を想起させる禍々しさがある。

その少女は『安楽少女』と呼ばれる喰人性の植物型モンスターだった。だが僅か２ヶ月で大きく変ってしまった。原因は勿論ゴジラである。

ゴジラが湖に住み着いた所為で、湖の水にゴジラの出汁が染み渡ってしまっているのだ。

ゴジラ細胞のスペックとポテンシャルに関しては今更語るまでも無いだろう。細胞に比べれば其れ程のものでは無いが、ゴジラエキスも相応の効力を秘めている。

安楽少女はその湖水を２ヶ月間吸い続け、偶にバーニングゴジラが無意識に放つ放射能を浴び、時折ゴジラが狩ったモンスターの死骸や怪獣討伐で得たマナタイトの余りを餌として与えられていたのだ。

安楽少女が通常通りの進化を遂げ、上位種族に到った場合は『安楽王女』に成る。どちらにせよ本来は直接的な攻撃手段を持ち合わせては居らず、腹黒い本性を擬態と演技でひた隠し、アルカロイドを多量に含んだ果実で獲物を釘付けにして衰弱死に誘うのだ。

だがこの個体はゴジラの影響による突然変異の異常進化、故に殆ど別種と言っていいくらいに変質している。性格は、基本的には冷酷無慈悲、ゴジラとサキエルは主と認識している為に忠実。多彩な攻撃手

段を獲得していて、戦闘能力はかなり高い。自分に敵対した者は、人間であったとしてもモンスターと同様に一切の容赦なく鏖殺し捕食する。

更に言えば、ゴジラ同様に際限なく進化し続け得る。もしかしたら、幾万年後には植物起源の破壊の神獣（GODZILLA・EARTH）になっているかもしれない。

冒険者ギルドは当然ながら看過不可として、準危険種と見なし新たな名称を付けた。

『彼岸棲姫（ビオランテ・リコリス）』と

？　？　？　？　？　？　？　？　？

アクセルの街の近くにある山岳湖にて、１０億もの賞金が賭けられた強大なモンスターが眠っている。

周囲の土地から凡そ１０年間に渡って魔力を吸収し蓄積、その膨大な魔力任せの超速再生と８頭の口腔攻撃で災厄を撒き散らす亜竜『クーロンズヒュドラ』

今から９年前、王都から派遣されてきた騎士団の精鋭部隊でさえ討伐は叶わなかった。だが、そのクローンズヒュドラの脅威に終止符が打たれる時が遂にやって来たのだ。

ギルドの酒場では、アクアが金欠に喘いでいる。あのアクシズ教の御本尊だけあって、計画性というモノと縁遠い。その刹那の衝動に身を任せる花火的な生き様はいっそ感心する。

ゴジラには関係の無い話だが、今や屋敷暮らしと為り、衣食住には困らない身の上で、冬越しの憂いは無いらしい。その安心感から気が緩んだのか、自分の金を早々に使い果たしてしまったアクア。

「こんな状況で、なんでお前の小遣い稼ぎに付き合わないといけない

んだ。俺は屋敷に引きこもってるからな！」
　筋金入りのニート根性をこれでもかと発揮するカズマ。立場的に断れないサキエルとクリス。強敵との戦闘なら受けるのも吝かではないめぐみんとダクネスとゴジラ。
　しかし残念ながら、アクアが調子に乗って暴走した場合に強制停止をかけられるのはカズマだけである。サキエルとクリスは、ヘマした時は上手くフォローしようが、余り強い物言いが出来ない。ゴジラはその気が最初から無い。めぐみんとダクネスは、普段は割と常識的なのだが一度スイッチが入ると暴走必至。
　この駄女神を迂闊に放置して、最終的に一番苦労する羽目になるのは誰か？言うまでも無くカズマである。
「っっ～～～!!ああ、もう！しょうがねえなあ！」
　何だかんだと言っても結局は一緒にクエストに行くのだった。

　作戦は単純だ。先ずアクアの女神としての水質浄化体質を以て湖を浄化する。その間にクリスとカズマは鋼鉄製のワイヤーで『バインド』の準備をする。ヒュドラが誘き出されたところにダクネスが『デコイ』で注意を引きつけ、『バインド』で首を拘束する。そこにめぐみんが爆裂魔法をぶちかます。
　ぶっちゃけゴジラだけで充分すぎるとか言ってはいけない。
　だが湖が広大なだけあって、思いの外時間が掛り手持ち無沙汰になる一行。アクアなどは浄化に飽きたのか、水面に漂いながら居眠りしだした。その様子に、すっかり空気が弛緩する。
「──────????????!!??????????」
　湖底から濃密な魔力が発揮され、巨大な影が浮かび上がってくる。ギルドが提示したものよりも明らかに大きい。
　カズマは今更ながらに思い出す。ギリシャ神話に謳われるヒュドラは、不死とも言える再生能力と、神すら死に至らしめる猛毒を有している。彼の大英雄ヘラクレスでさえも一人では殺しきれなかったモンスターだ。もしもこのクローンズヒュドラがギリシャ神話のヒュドラと同質であるならばヤバイなんてもんじゃや無い。

（いっ、いや大丈夫だ、おちつけ俺。そうだ、今此処には無敵の怪獣王がいる！そうだ、この程度の相手などゴジラを以てすれば恐れるに足りぬわ!!ふ、フフフハハハハ！）

実際にゴジラとクローンズヒュドラの間には決して超えられない差がある。スキル『ネガ・ジェネシス』がある限り一方的に斃しに行くだけの存在でしか無い。もっとも、純粋な実力勝負でも結果に大差は無いだろうが。

「いいか、皆!?落ち着いて聴け！━━━━作戦変更、ゴジラ様お願いします!!」

「ちょ、ちょっと━━!?」

「う～ん、これはしょうが無いね。」

「!!」

「～～～～～!!!～～～～～～!!!」

クローンズヒュドラの咆吼による八重唱は共鳴現象を引き起こし、物理的な衝撃波となって迫り来る。サキエルが咄嗟に結界を張っていなければ耐久値に乏しい面々は倒れていたかも知れない。其れでも尚、爆音によって平衡感覚が麻痺し、少々の間は戦闘不能に陥った。

「」

ゴジラは熱線を放ち、頭の1つを爆散させる。だが、ものの数秒であっさりと再生。今度は此方のターンとばかりに幾多の首でゴジラを締め上げに掛るクローンズヒュドラだが、体内放射の一撃で千切れ飛ぶ。その首もまた再生するが、ゴジラも黙ってみているだけでは無い。熱線を連発し、千切れた首が再生する頃には凡そ同数の頭を爆滅させていた。

??????????!??????????!!??????????????!!??????????????!

クローンズヒュドラには既に戦意は無くなっていた。このまま戦ったとしても、勝算など皆無であると文字通りに痛感したからだ。さりとて湖底に逃げ込む事にも意味は無く、逃げたところでゴジラは確実に追撃に移行する。だがそれでも、クローンズヒュドラの本能は逃走を選択する。

「っ！逃がさん！」

退路を防ぐように回り込んだダクネスがその身を以て全力で押し

留める。如何にクローンズヒュドラが相手とと言えど、ダクネスは容易く突破される程に柔では無い。寧ろダメージを受ける程にボルテージが上昇していく。おまけにアクアが随時回復させる為、突破は困難であり

「!??????????????!!!」

ゴジラはクローンズヒュドラの尻尾を掴み抱え、湖とは逆方向に全力でぶん投げた。トドメを刺そうと背鰭を明滅させて

そこに、まるっきり空気という物を読まず、美味しいところを掻っ攫っていこうとする紅魔族の詠唱が響き渡る。

「黒より黒く、闇より暗き漆黒に、我が真紅の混淆に望み給もう。覚醒の時来たれり、無謬の境界に堕ちし理、無業の歪みと成りて現出せよ！踊れ、踊れ、踊れ、我が力の奔流に望むは崩壊なり。並ぶ者なき崩壊なり！万象等しく灰燼に帰し、深淵より来たれ！――――『エクスプロージョン』!!」

めぐみん渾身の爆裂魔法はクローンズヒュドラに直撃し、木っ端微塵にした。

「フッ。・・・最高、です。」

ちなみに、散らばった残骸は回収された。亜種とは言えドラゴンの肉片故、売ればソレなりの値打ちが着く事間違いなしだったが、最終的には彼岸棲姫のご飯になった。

ノイズの技術力は世界一イイイ!!できんことはないイイイ――――――ッ!!!

《緊急!緊急!デストロイヤー警報!!デストロイヤー警報!!機動要塞デストロイヤーが、現在この街へ接近中です!街の中にいる冒険者各員は、至急戦闘態勢を整え街の正門に集まって下さい!繰り返します。街の中にいる冒険者各員は、至急戦闘態勢を整え冒険者ギルドに集まって下さい!特に、ゴジラ様とサキエル様は可及的速やかにお願いします!!そして、街の住人の皆様は、直ちに避難してくださいっ!!》

もはや、毎度お馴染み感すらあるアナウンスがアクセルに響き渡る。いや、今回はいつも以上に切羽詰まっている感じだ。機動要塞デストロイヤーとやらが一体何なのかは相変わらず良く分からないが、相当にヤバイのは流石に察しがつく。

アクアは七転八倒しながら荷物をまとめ、真っ先に逃げだそうとしている。めぐみんは諦観の表情で茶を啜りながら、魔王城へのカチコミを提案する。ダクネスはかつて無いガチモードでギルド出頭を催促してくる。クリスは雪精討伐クエスト以来ご無沙汰。

そもそも、機動要塞デストロイヤーとは一体何なのか?それは太古に栄えた技術大国ノイズによる負の遺産に他ならない。通った後にはアクシズ教徒以外、草も残らないとまで言われる極めつけの大物賞金首だ。

全長：８０メートル
重量：２５０００トン
最高移動速度：６００km／h
動力：永続宝珠コロナタイト
材質：超耐熱合金ＮＴ１Ｓ
装甲：特級対魔障壁
武装:自動対空撃用ハイパワーメーサー×４、ファイヤーミラー、パ

ラライズ・ミサイル×2、放射線流、強縛デスクロスネット、侵入者迎撃用自立型ゴーレム多種多量、自爆装置

そのスペックも、異次元の領域である。ゴジラであっても、サイズダウンした今の状態では厳しいと言わざるおえまい。何しろ、当時のノイズには優れた対魔王軍用兵器の数々や大勢の紅魔族達が居たのにもかかわらず、逃げる事しか出来ず滅亡してしまったくらいなのだ。

ギルドの作戦会議にて明かされたそれらの情報は、「どうせゴジラが居るんだから何とかなるっしょ」とタカをくくって楽観していた多くの冒険者達に絶望を抱かせ、当のゴジラは闘争本能を燃え滾らせた。

文字通りに難攻不落の要塞デストロイヤー攻略作戦会議は紛糾を窮める様相を呈している。並大抵の火力の魔法では障壁に掻き消される。障壁を貫通し得る超火力魔法は事前に感知されて、持ち前の機動力で回避されるか、先制攻撃で潰されるか、下手をすればファイヤーミラーで威力を増幅された状態で反射される。

アクアが女神パワー全開で『セイクリッド・ブレイクスペル』を撃ち込んだとして、果たして真面に命中させられるかどうか。当たりさえすれば障壁を破れようが、カウンターを喰らう恐れもある。

仮にアクアの攻撃が無事成功して障壁を破ったとして、次撃にて機動の要である脚部機関の破壊が望ましいが、やはり先程と同様の問題が立ち塞がる。否、より一層に危険となるだろう。と言うか、スーパーXⅢはコーティングを施されていたとは言え、バーニングゴジラの赤色熱線の直撃を2度喰らっても耐えていたのを考えると・・・・最低でも爆裂魔法をクリーンヒットさせる必要がある。めぐみんとウィズによる左右全くの同時攻撃、それでも分の悪い掛けと言わざるおえない。

そしてゴジラが限界までチャージしたバーニングスパイラル熱線で炉心を撃つ抜く。無論、容易くは無いだろう。最大の急所である故に、決して外部からの攻撃を受けないよう厳重に護られている筈なの

だから。
　万一にも放射流線で反撃されようものなら、片手の指で数えられる位の者しか生き残れないだろう。第一段階の広域核焔熱は、破壊力はそこそこ程度だが都市丸ごと炎の海に沈める程の攻撃範囲を誇り、それ故に市街地における対人殺傷能力は恐るべきものだ。第二段階の収束熱線については、使用した記録が無い為に詳細は不明なれど、設計理論通りであるなら使用は可能な筈である。その場合の威力がシン・ゴジラのものと同一であるのならば、直撃に耐えうるのはアクアとゴジラのみ、サキエルやウィズやダクネスですら耐えきれずに灰燼と為り果てるだろう。

　しかし漢達は諦めない。不撓不屈の瞋恚を以て斃す為の作戦会議を続ける。その全員がとある店の常連と言うのはナイショだ。
　ウィズが自分の店から持ってきた魔道具やポーションを手に取り、どうにかして足止めに使えないか話し合う。兎にも角にも、アクアの攻撃が当たらなければどうしようもないからだ。その為にはデストロイヤーの機動力を多少なりとも削がねばならない。だが芳しくは無い。
　爆発系ポーションを予想侵攻ルートに埋めて地雷にする。無駄に強力な魔道具を敢て自壊させ、その魔力を炸裂させる。長大な特製のワイヤーを用意して、盗賊職全員で『バインド』を掛ける。他にも様々な意見が出た。その中で一番有効と思われる案は、彼岸棲姫（ビオランテ・リコリス）をコロナタイトで強化して蔦で拘束する、と言うものだった。

？　？　？　？　？　？　？　？　？

「・・・やはり、このままでは拙いですね。なんとかしなければ・・・」
そこは厳かな空気が満ちた、紛う事なき神殿。その空間に唯一存在する玉座に在すは、女神エリス。この世界における管理者にして最大宗教の主神である。
「はぁ、こうなっては致し方ありません。・・・まあ、先輩のおかげで規定違反も今更ですしね。」
その手に持つ書類にはこう書かれていた。
ゴジラ拘束制御術式解放承認

ゴジラVSデストロイヤー

この世界の冒険者達はカードを使ってスキルポイントを消費することで様々なスキルを習得する。そうすることで人は漸くモンスターという脅威に立ち向かうに足る技能を得られるのだ。
だが、此処に例外が存在する。
ゴジラである。ゴジラはカードを常時サキエルに預けており、自分では触ったことすら殆ど無い。今習得しているスキルも、元々なんとなくで出来ていたことが、冒険者になったことで明確なスキルに昇華されたにすぎないのだ。
今、ゴジラの習得可能スキル一覧に、新たなスキルが表示された。

神聖拘束制御術式解放　習得に必要なスキルポイント：１００
自分の意志で何時でも本来のサイズに戻ることが出来る。

？？？？？？？？？？
？？

アクセルの正門前に広がる平原にて、必滅の意を以てデストロイヤーを迎撃せんとするは灼熱の怪獣王バーニングゴジラ。やや後方にて大天使サキエルと、コロナタイトを携えた彼岸棲姫。当作戦の要とも言える、女神アクア。
正門前にはダクネスやカズマ、街の冒険者達。そして、正門の両隣にある見張り用の高台にはアークウィザードにして爆裂魔法担当のウィズとめぐみん。
遂にその時がやって来た。

「???!!????????!??????????????!!」

デストロイヤーがバーニングゴジラをアナライズスキャンし、脅威度を測る。その瞬間、デストロイヤーの脚が止まったのを黙って見逃す冒険者では無い。

ビオランテ・リコリスが蔦を幾重にも脚に絡ませ、しかし予想通りに引き千切られていく。いかにコロナタイトの恩恵を得ようとも、足止めさえ１０秒と持たない。だが、十分だ。

「神の力、思い知れ！――――『セイクリッド・ブレイクスペル』!!!」

デストロイヤーの対魔障壁と、アクア渾身の神聖魔法がぶつかり合う。数秒の拮抗の後、競り勝ったのはアクアの魔法。デストロイヤーの特級対魔障壁が甲高い破砕音を響かせる。

デストロイヤーにとって紛れもなく痛手なれど、駆動力や攻撃力は未だ健在。己を破壊しうる脅威を粉砕するべく進撃を開始する。だが突如、脚下の地面が大爆発する。街中から掻集めた魔道具を惜しみなく大量に使用した特製の地雷が起爆したのだ。

すかさずサキエルの『フリーズバインド』や、冒険者各員のスキルや魔法が放たれる。そして

「黒より黒く、闇より暗き漆黒に、我が真紅の混淆に望み給もう。覚醒の時来たれり、無謬の境界に堕ちし理、無業の歪みと成りて現出せよ！踊れ、踊れ、踊れ、我が力の奔流に望むは崩壊なり。並ぶ者なき崩壊なり！万象等しく灰燼に帰し、深淵より来たれ！――――『エクスプロージョン』!!」

古より暴走し続け、未だかつて誰も破壊するに到らず、天災とまで謳われるに到った超兵器、機動要塞デストロイヤー。

冒険者達はこの古代兵器の真髄を見損なっていたと言わざる負えない。

デストロイヤーは上顎に相当する部分を展開し、ファイヤーミラーを以て二重爆裂魔法を受け止め、光線を打ち返したのだ。

「??????????????!!?」

バーニングゴジラのフルチャージのバーニングスパイラル熱線と相殺、大爆発を引き起こした。これによりファイヤーミラーは破損し標準のコントロールがきかなくなりはしたが、冒険者達に与えた衝撃

は計り知れない。
　デストロイヤーは先ず邪魔な有象無象から片付けようと、後方に『強縛デスクロスネット』と『パラライズ・ミサイル』を放つ。アクアとサキエルとビオランテ・リコリスが対処するが、このままではジリ貧、敗北は確定的に明らか。
　サキエルはバーニングゴジラに回復魔法と支援魔法をかけながら、必至に思索する。
　やはりゴジラこそが最期の希望であり、しかしこのままでは例え破壊に到ったとしても、炉心温度が限界を超えて死滅する可能性が非常に高い。
「何か、何か手は・・・・・っ!?」
　大天使サキエルに女神エリスから天啓が下った。サキエルはゴジラの冒険者カードに表示されている習得可能スキル一覧を確認、『神聖拘束制御術式解放』を発見すると即座にポイントを消費し、スキルを獲得させた。ゴジラ本人の合意は得ていないが、状況が状況だ、事後承諾して貰うしかない。
??????????????!!
　闘争において、大凡にして身体の大きさは強さに直結する。格闘系の競技が何故に体重別で行われるのか、身体の大きさとはそれ程如実に力の差を生じさせてしまうからだ。
「??????!?????????????!!」
　久方ぶりに本来の身体に戻り、掛け値無しの全力を発揮出来ることに歓喜の雄叫びを上げるバーニングゴジラ。
　バーニングゴジラは立て続けの3発もの赤色熱線を浴びせ掛ける。デストロイヤーはファイヤーミラーで受け止めようとするが、熱と衝撃に耐えきれずに完全に損壊する。
　デストロイヤーは自慢の高機動能力を生かし、バーニングゴジラの周囲を飛び回りながら『強縛デスクロスネット』を浴びせ『パラライズ・ミサイル』で動きを止めようという算段だったようだ。しかしデ

スクロスネットは炎熱に弱いという、バーニングゴジラ相手には致命的な欠点があった。パラライズ・ミサイルにしても、効果が発揮するには何十発と撃ち込まなければならない。

!そもそもゴジラの学習能力は決して低くは無い。ワンパターンな攻撃を繰り返し続ければ見切り、カウンターを合わせて撃墜することも可能。

??????????????????尻尾攻撃で五月蠅く飛び回るデストロイヤーを叩き落とし、赤色熱線の連射で脚部機関を完全に吹き飛ばした。

「??????????????!!??????????????!!」

だが、バーニングゴジラの炉心はかなりの温度にまで上昇している。これ以上のヒートアップは流石に拙い。戦うにしても、一度冷却して炉心温度を下げなければならない。そう判断したサキエルとアクアによって緊急停止をかけられた。

デストロイヤーの炉心部、コロナタイトが設置されている部屋にソレは鎮座している。

「マサカ、デストロイヤーガ・・此程ノ痛手ヲ被ルトハ・・・」

侵入者を迎撃する為の、管制司令官として作られた高性能人型ゴーレム『ポートダーウィン』。白濁した肌と髪、鮮血の如き瞳、額の一本角、両の掌は禍々しい鉤爪、背後にはタンクが二つ、右側からは邪竜の顎、左側にはクレーンのついた砲台。

そして、デストロイヤーの敗北が確定した場合、自爆機能を作動さ

せる役割も担っていた。
自爆機能を作動させ、自動的にアナウンスが流れる。外でデストロイヤーに侵入する機会を窺っている冒険者連中にも伝わっただろう。
邪竜の顎より輩出された幾多の自立飛行式小型ゴーレムを通して侵入してきた冒険者達を発見する。
「クルナ、ト・・・イッテイル、ノニ・・・」
その様子は陰鬱としていて、まるで摩耗し果て、あらゆるものに倦んでいるかのようであった。

機動要塞陥落

当初の予定とは些か異なるものの、機動要塞デストロイヤーが遂に地に墜ちた。

だが、このまますんなりと終わるとはとても思えない。サキエルが事前にもたらした情報によると自爆機能が組み込まれているのだ。

だがそこでＫＹに定評のある駄女神がフラグをおっ立てる。

「あはははは、やったわ！さすがゴジラ！さーあ、帰って乾杯よ。報酬はお幾らかしらね？」

「このバカ！なんでお前はそうお約束が好きなんだよっ!?」

案の定

『当機体は甚大な被害を受けました。よって自爆機能を作動します。繰り返します。当機体は甚大な被害を受けました。よって自爆機能を作動します。搭乗員は可及的速やかに退避して下さい。』

カウントダウンが開始された。

爆発まで、あと３０分

仮に、このままデストロイヤーが丸ごと大爆発した場合、その威力は水爆クラスになるだろうとサキエルは推測する。

街そのものを吹き飛ばす規模の爆発である。今更全力で逃走したところでもう間に合わない。テレポートにしても、使い手の数が圧倒的に不足している。

冒険者達に残された道はただ１つ。デストロイヤーが自爆する前に、機体内部に直接乗り込んで自爆装置を停止させるか、動力源であるコロナタイトを破壊するしか無い。

決死の覚悟を抱いて突撃を敢行する冒険者達。

「「「「ウウオオオォォォ!!!」」」」

そこに、自立飛行式小型ゴーレムが飛来し最終通告をする。だが、冒険者達には既に撤退という選択肢は無い。この期に及んでは前進あるのみである。

最終通告を聴いて尚も進撃を開始する冒険者達に対して、本当に久方振りに見た生きた人間なのに、ポートダーウィンは感慨を抱く事さえ無かった。己の創造主が死んで以来、延々と唯独りであったのだ。感情が摩耗し果てるのも無理からぬ事であろう。

「クルナ、ト・・・イッテイル、ノニ・・・」

もはや是非も無し、敵勢と判定を下し排除に掛る。

搭載飛行機からメーサーバルカンの斉射で機体内部への侵入を防ぎつつ、デストロイヤーの周囲に屯している者達に対してもメーサーバルカンで攻撃。しかし元々牽制のための武装故に、如何に数で補おうとしても冒険者達を殲滅するにはやはり火力不足。

しかし、だからといって侵入者達に蹂躙されるを良しとする気は無い。蟻の群に蝕まれるような末路だけは御免だった。何より、静かに眠る創造主の躯を暴かれるのは断じて許せない。

デストロイヤーと共に爆散するのはいい。それは最初から想定されていた事で、最期の任務でもある。

あの破壊の権化にデストロイヤー諸共完全破壊されたとしても、受け入れよう。最期の相手があれほどの規格外であれば、寧ろ清々しくさえある。

彼の破壊神を見て、ふと創造主が最期に残した願いを思い出す。

『俺はもう長くない。今更この世に未練は無いが、お前の事だけは心残りだなぁ。・・・もしもこれから先、この暴走したデストロイヤーが負けてぶっ壊される時が来るかも知れない。そん時、律儀にデストロイヤー諸共自爆するこたぁ無いんだぜ？出来る事なら、お前にはこの世界を見て回って欲しいなぁ。デストロイヤーを攻略した連中の中に、お前の眼鏡にかなうヤツが居たらソイツについってってみるのもいいかもな？』

アクアを始めとしたプリースト達の支援魔法によってフルブース

トされている上に、一部の男共は異様にモチベーションが高い。とある事情で隠れた実力者が多かったりするのもあり、多少の被弾はものともしないのだ。その様は頼もしくはあるのだが、正直言って引く。

飛行型ゴーレムはビオランテ・リコリスの樹液や種弾、各種魔法や矢射といった飛び道具で撃墜していく。射撃についても、耐久値の低い後衛はダクネス等のクルセイダーが常にカバーしているため、重傷者は未だ出ていない。

だが、突出した前衛達に対して飛行型ゴーレムが自爆特攻をし出した。

「まだだ！・まだ終わらんよ！」「何のこれしき――――!!」「おんどりゃああぁぁぁ!!」

少なく見積もっても炸裂魔法程度の威力はあるだろうに、漢達は突き進む。幾たびの空襲を越え未だ負けず、唯の独りも脱落は無く、唯の一度も（事情を知らない女性陣には）理解されない。漢達はひたすらに煩悩（りそう）に向かって突き進む。故に、その生涯は決して果てず。彼の者達の魂は、きっと――――

そうして遂に辿り着いた勇敢なる冒険者達。そこに居たものとは！

ボンキュッボンのムッチリボディ×ノースリーブの縦セタ横乳×膝立ち上目遣い＝超ドエロい姉ちゃん

これには漢達も動揺を隠せない。だが即座に気を持ち直す。どの様な姿形をしていようとも、ギルドの看板受付嬢のルナをも圧倒し得る破格の胸部装甲を誇っていようとも、あくまでゴーレム。そうだ、安い値段でありながら至れり尽くせりの淫夢サービス、其れを失う事に競べれば何を畏れるモノがある?!

「お、おい！・アイツの後ろ・・・」

恐らくは責任者と思われるが、まるで即身仏のように、操縦席に腰掛けたまま白骨化した遺体。そして、ボウリングボールくらいのサイズのコロナタイトが浮いた状態で輝いていた。赫灼（あかく）、紅焔（あかく）、緋炎（あかく）。

思わず、といった感じで部屋の中に1歩を踏み入れる冒険者の一人。
「ッ!!――――入ッテ、来ルナ!!」
それに激しく反応する美女型ゴーレム。邪竜が咆哮を上げ、顎からミサイルが放たれた。
「「「「うぅおおおぉぉぉ!?!?!」」」」
たった一発で鋼鉄の大扉諸共盛大に吹っ飛ばされる一同。その威力は明らかに飛行型ゴーレムの自爆特攻を上回っている。咄嗟にアクアが『セイクリッド・プロテクション』を展開して直撃を防ぎ、ウィズが『カースド・クリスタルプリズン』で爆焔を相殺していなければ多くが死んでいただろう。如かし、死んでないだけで戦闘不能な状態に陥っている。ウィズも今ので魔力を使い果たし、戦力外となってしまった。
「～～～っ!よくもやってくれたわね!?女神の鉄槌を喰らいなさいな!!『ゴッドブロー』!!」
アクアの放つ怒りと悲しみを乗せた拳に対して、相手のゴーレムも正拳突きを以て応える。超越者たる女神の聖拳と、鉄拳を凌駕するオリハルコン製の正拳が激突する。
轟音と衝撃波が生じ、尚も二人は拳を付き合わせたまま。先に動き出したのはアクアだった。アクアの表情が次第に変っていく。
(?ω?)→(゜;ω;゜)→。。(。゜д゜。)。。
「あっ、アクア――――!?くっ、コレでも、喰らいやがれ!!『スティール』!!」
カズマの掌には目論見通りにズッシリとした重みが。
「フッ、計画通・・・って、アアッチャ――――!?!」
全ての原動力であったコロナタイトを首尾良くとは言い辛いが、とにかく奪取出来たのは大きい。デストロイヤーの機能を停止させたのだ、大金星間違いなしである。しかし、これで一件落着・・・とは行かなかった。
「ッ!?――――マダダ、マダ私ハ戦エル。我ガ創造主ノ技術ノ真髄、ソノ一端ヲミルガイイ!!」

コロナタイトの影響もあってかなり高めだった室温が急激に低下していく。ゴーレムの周囲は霜が降り始めている。
「アイツ、ゴーレムのくせに氷結魔法なんて使えるのかよ!?」
「・・・いいえ、あれは恐らく、周囲の熱を吸収して自分の魔力に変換してるんだと思います。」
と、ウィズが。流石はかつて『氷の魔女』と畏れられた氷結魔法のエキスパートだけあり、即座に看破した。
つまり、これはあくまでエネルギーチャージでありながらも、使い方や状況次第では攻撃や防御としても機能し得ると言うわけだ。しかも、副次的に生じる物理現象に過ぎない為、対魔法用のスキルや装備品では防げない。
「あれだけ魔力を充填した以上、本命が来ますよ!!」
砲身がウィズに向けられ、対物ライフル弾並の大口径の実弾をぶっ放してきた。本来なら魔力のきれたアークウィザードに為す術など無い。だがウィズは不死王（リッチー）であり、唯の物理攻撃ではダメージを与えることさえ出来ないのだ。
ちなみに、対物ライフルによる対人狙撃は、ハーグ陸戦条約で禁止されている。まあ今回の使用対象は伝説級のアンデッドモンスターにして、魔王軍幹部の一角を務める者なのだが。ついでに言えば、正式には対化物戦闘用１３ｍｍ炸裂徹鋼弾であり、化物を殲滅する為の特別な拳銃用の弾丸である。
しかし、再びアクアが『セイクリッド・プロテクション』を展開し、ウィズに放たれた３点バースト射撃を防ぎきった。だが聖光壁には亀裂が走り、フルオートでもされようものなら今度こそ御陀仏間違い無しである。
だがそこで
ズシン
ゴジラが復活したのだ。
「!?今だ、隙アリ！『スティール』!!」
相手はゴーレム、故に部品を奪うことが出来れば・・・しかし、カズマの掌に収まっているのは、一冊の古ぼけた手記。恐らく元から上

等な品質とは言い難かった上に、長年に渡ってコロナタイトに晒され続けていた所為だろう。表紙は風化寸前、中の頁は黄ばんでいて、文字は滲んだり擦れたりが殆どで、ちょっとやそっとじゃ解読できない。

「!!?!・・・ソレヲ、カエセ・・!!」

「おっととと~? はっはーん、どうやらコレはアンタにとってとても大事な物のようだな。なら、コレを返して欲しければ、一切抵抗することなく投降し、今後も一切の敵対行為をしないと誓え!!」

「!!━━━━━━」

????????????!!????????????!!

悪辣な笑みを浮かべるカズマに、ゴーレムは憤怒の形相で睨み付ける。

その様子を見ていた他の冒険者達は須くドン引きしていたが。

ゴジラの豪咆の直後、天井付近が赤色熱線によって消し飛んだ。そしてゴーレムは遂に観念したらしく、しかしせめてもの意地なのか、そこから中を覗き込むゴジラに対してのみ降伏を宣誓したのだった。

ZILLA

機動要塞デストロイヤーは完全に陥落し、数ヶ月。
開発責任者の遺体は手厚く弔われた。
管制司令官を担っていたゴーレム『ポートダーウィン』はゴジラに従属の意を示し、ゴジラもそれを容認した。もはや、彼岸棲姫（ビオランテ・リコリス）同様にゴジラの眷属と言って何ら差し支えない。G細胞への適正値が高く、全身が生ける超金属（ゴジラタイト）と化しつつある。甲高く抑揚の無い単調だった声音も、生身の人間らしく流暢になった。何時れは無限増殖（メカゴジラ）する超金属の破壊装置（シティ）に成り果てるやも知れない。
大破状態でスクラップ手前のデストロイヤーと、主動力源として使われていたコロナタイトは、王都から派遣されてきた近衛騎士団だかの連中が徴収していった。ゴジラを筆頭に居丈高な態度に苛ついた冒険者もそれなりに多かったが、小煩かった出戦要請が一旦止んだので良しとした。冬に入って寒くなった御陰で蟲怪獣軍団が沈静化しだし、戦線が極僅かながらも人類優勢になったのもあるだろうが。
領主としての務めを果たすどころかぶん投げて真っ先に逃げ出したくせに、成果だけを掻っ攫おうとした横暴な悪徳貴族がいたりもしたが、中々思い通りに巧く行かない事に苛立ちを募らせ、禁制の魔道具でモンスターを召喚し邪魔者を始末しようなどと言う愚考を抱いた挙句の果てに実行する暴挙に走った。結果は勿論大失敗で、領主は死亡し、屋敷一帯は壊滅状態。ただでさえ元から民衆からの支持が低い上に、今回の一件で一族郎党揃って国から見限られたのだった。余談だが、崩壊した屋敷の周辺で紅い甲殻類の様な怪獣を目撃した者が居たとか何とか。
他にも、雪精の頭領「冬将軍」の討伐しカズマ一行のリベンジを果たしたり、地の大精霊「這い寄る混沌（ナイアルラトホテップ）」を撃滅したり、魔王軍幹部にして地獄の公爵見通す大悪魔（バニル）を討ち取ったり、その他些事が色々とあった。
？　？　？　？　？　？　？　？　？

？　？

冬が過ぎ去り、雪溶けも進み、麗かな春も目前。
《緊急！緊急！怪獣警報!!怪獣警報!!巨大な怪獣とモンスターの群勢が現在この街へ接近中です!!街の中にいる冒険者各員は、至急戦闘態勢を整えギルドに集まって下さい！繰り返します。街の中にいる冒険者各員は、至急戦闘態勢を整えギルドに集まって下さい！特に、ゴジラ様とサキエル様の一行は必ずお越しくださいますようお願いします!!》
またもギルドの緊急招集令が街中のスピーカーから発せられた。
「おいおい、またかよ～」
「しかたありません、この時期はいろんな生き物が冬眠から目覚めて動き出しますからね。怪獣といえど例外では無いのでしょう。」
「今度のはどんな怪獣なんだろうな？できればズシンと重く響く攻撃をしてくるヤツだといいんだが・・・」
「まあ怪獣の方はどうせゴジラがやっちゃうでしょ。取り巻きの雑魚モンスターもサキエル達が居るんだから楽勝よ♪」

ゴジラ湖の周囲にて迎撃の準備をする冒険者達。
ゴジラは縮小状態のサイズで、特に荒ぶって居らず、むしろ煩わしい感が目立つ。サキエル、リコリス、ポートダーウィンも戦闘準備は整えているものの緊迫感は希薄。
その様子から今回の相手は大したことは無いと確信し、余裕ぶっこく冒険者達。
そこに『千里眼』スキル持ちが怪獣を視認する。
一際デカい1体が怪獣というの察した様だが、他にも人間大の蜥蜴

が何百と追従してきていた。
その怪獣（イグアナ）の名はＧＯＤＺＩＬＬＡ。怪獣としては紙同然の耐久値（それでも強化魔法で底上げされたダクネス並）だが、Ｆ１カーと同等以上のスピードと、『敵感知』『潜伏』『逃走』『回避』のスキル群を獲得していた。攻撃面では、放射熱線の代わりに超可燃性の吐息を撒き散らし、歯を打ち鳴らすとこで引火させ爆発を引き起こす。
更には、同種の幼体の大群。ブレスは未だ吐けないが、既にして軽自動車並みのスピードを誇る。スキル群も親からちゃんと受け継いでいる様だ。
だが、直接神器で召喚された親ＺＩＬＬＡとは違ってベビージラ群はこの世界で生れた命である。故に怪獣であってもスキル『ネガ・ジェネシス』を有して居らず、斃されて躰がマナタイトに変化する事も無い。手練れの冒険者であれば充分に渡り合う事が出来る相手だ。しかも亡骸を加工すれば怪獣を傷付けられる武器になるのだ。王都が蟲怪獣達やメガニューラの大群に襲撃を受けても持ち堪えられているのもこれが理由である。当然ながらその躯は高価な値が付き、経験値も通常のモンスターより高い。危険を承知で挑むに値する相手である。・・・まあ、上位の怪獣達は素でミサイルを爆竹程度にしか感じないぶっ壊れ耐久なのだが。
あ、ついでにリザードランナー達も居る。
だが、待ち構えていたゴジラ達を見て、警戒し躊躇している様子。
そこで先ず、アクアの『フォルスファイア』とダクネスを筆頭にしたクルセイダー達の『デコイ』で突貫させ、サキエルとウィズが両サイドに『ボトムレス・スワンプ』を仕掛け、身動き出来なくなった獲物にゆんゆんの上級魔法やバニルの破壊光線、その他冒険者達の遠距離攻撃が降り注ぐ。
中央突破してくるベビージラ群には、めぐみんの爆裂魔法（エクスプロージョン）、ポートダーウィンの艦載機による一斉掃射、彼岸棲姫（ビオランテ・リコリス）の串刺し、おまけでカズマの狙撃（無駄にイケヴォ）が続く。
そして、怪獣王ゴジラＶＳＧＯＤＺＩＬＬＡ。コレについては語るまでも無いだろう。分かりきっていた結末である。

数日後、諸々の事後処理が済んで冒険者ギルドの酒場で祝勝会の最中、幾つものニュースが舞い踊る。

紅魔族の里を壊滅させたスペースゴジラに対して、紅魔族がガチでリベンジを画策している。

アクアの聖地であるアルカンレティアにて周囲一帯を汚染しまくる厄介な怪獣（ヘドラ）と魔王軍幹部（ハンス）が猛威を振いだした。

王都にて、蟲怪獣達に加えて、紅魔族の里担当だったシルビアと封印（乾眠）されていた（したガイガン）超大型の魔物によって窮地に陥っている。

何処もがゴジラ一行に参戦要請してきている。